TS転生者は『偏在』したい【完結】

潮井イタチ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「この鏡に映ってる子、めちゃくちゃかわいい」

ゼロ魔世界で銀髪美少女に生まれ変わった元男・現女のＴＳ転生オリ主が、ナルシストを拗らせた結果分身して自分とイチャイチャするために『偏在』を覚える話。

目次

01 | 鏡のルシィ ―― 1
02 | 木霊の幻獣 ―― 11
03 | 偏在の教師 ―― 18
04 | 一行の道程 ―― 25
05 | 望郷の銀月 ―― 34
06 | 天空の旅路 ―― 44
07 | 1 | 決戦の前夜（前） ―― 53
07 | 2 | 決戦の前夜（後） ―― 60
08 | 1 | 異界の双風（前） ―― 71
08 | 2 | 異界の双風（後） ―― 81
00 | 0 | 自由の遍在（完） ―― 100
0X | X | 後日の休日（番外） ―― 111

01 ―鏡のルシィ

トリステインのさる令嬢。
ジョンキーユ伯爵家の三女であるルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユは、十歳のある日、生まれて初めての恋をした。
「この鏡に映ってる子、めちゃくちゃかわいい」
そう。自分の姿に、恋をした。
この少女、ルシィには前世の記憶がある。
前世において、ルシィは女ではなく男だった。
それも、このハルケギニアとは異なる世界、地球と呼ばれる場所で生きた男子高校生であった。
ルシィになる前の彼は、ごく平凡な、十五歳の少年だった。多少女好きで、ややロリコンの気はあったものの、それを除けばおおよそ普通。性癖が高じて女性に手を出すようなことも当然なく、ごく一般的な常識と良識を持ち、家族や友達と幸せに過ごしてきた。
が、彼は死んだ。
なんでもない学校の帰り道に、暴走して突っ込んできたトラックに撥ねられ、その人生を終えた。
しかし、その魂は数奇な運命を経て、このハルケギニアに流れ着いた。
彼は二度目の人生を得て、彼女となった。
ジョンキーユ家の貴族令嬢に生まれ変わり、ルシィと名を与えられた彼女。
しかし、裕福な貴族の家に生まれながらも、彼女の心は決して幸せではなかった。
「――いえに、かえして」
齢一歳にも満たぬルシィの、最初に喋った言葉がこれである。
ルシィは、自分の転生を受け入れられなかった。
家族に会いたい、友達に会いたい。読みたい本があって、食べたい物がある。やりたいことがあって、成したい夢があった。そして、その全てを、新たな生を対価に奪われた。

この地球ならぬ大地では、二つの月が浮かぶハルケギニアでは、もう自分の前世を顧みることさえ出来ない。ルシィは絶望し、泣いた。どうしてあのまま死なせてくれなかったのかと喚いた。

ルシィの両親は狼狽えた。何しろ、普通なら言葉も喋れぬほどに小さな赤子がそんなことを言ったのだ。娘が何か悪いものに取り憑かれているのではないかと憂慮し、それはただの悪い夢だと言い聞かせた。しかし、そう言われる度にルシィの心は傷つき、二歳になる頃には鬱病にまで罹り、部屋に引きこもるようになってしまった。

人間の心は二年も経てば自然と環境に順応するものだが、なぜかルシィの心はいつまで経っても慣れることを知らなかった。それが転生による影響であるのか、あるいはそういう魂だったからこそ転生を果たしたのか……もはや誰にも分からぬことだったが、ルシィにとってはただただ不幸なことでしかなかった。

「ルシィはもう駄目だ」

父であるジョンキーユ伯爵は匙を投げた。

この子に関しては諦めよう。どうせ三女だ。育てばそれなりに見目良くなりそうだし、政略結婚の道具にでも使えればそれで良い。我が子に対し、あまりにも冷たい態度であった。

しかし、ルシィの母は娘の面倒を見続けた。自分のことを母とも言わぬ娘に、ひたすら愛情を注ぎ続けた。

普通なら不気味に思うような子供だったが、ルシィの母は辛抱強かった。病気がちの自分が無理に産んだ子だったために、何かおかしな病が胎の中にうつってしまったのではないかと、罪悪感を感じていたのだ。

彼女は娘のわけの分からぬ話を笑顔で聞き、話し相手になり、聞いたこともない料理をメイドと一緒になって作り、食べさせ、欲しい物があれば何とか作れないかと職人に頼み込み、似たようなものを用意した。

ルシィはそんな母親に対して、少しずつ心を開いていった。

ルシィの中では他人でしかなかった母を母と呼ぶようになり、部屋からも少しずつ出るようになった。

母の勧めで気味が悪いと遠ざけていた魔法を勉強し、初めて風の魔法を使った際には、生まれてから一度も見せなかった笑顔さえ浮かべた。

だが、彼女の中にある闇はそう簡単には晴れなかった。

ルシィは、自分が自分でなくなってしまったことがずっとずっと怖かった。自分の姿が映っていないことが怖くて、鏡に向けてウィンド・ブレイクを撃ち放ったことさえある。母はルシィの目の届く範囲に鏡を置かないよう使用人達に言いつけ、齢五歳にも満たぬ幼女の魔法の破壊力に怯えた使用人達は、勢いよく首を縦に振り恐々と従った。

そんな情緒不安定なルシィだったが、彼女が十歳になってしばらく経ったある日、一つの転機が訪れる。

それは、母親からの、舞踏会の誘いだった。

「……その舞踏会には、僕が、どうしても出なければいけないんですか？」

「ええ、お願い、ルシィ。ごほっ……あなたに会ってみたいっていうメイジの方々がたくさんいらっしゃるの。この歳でラインスペルを使えるなんて聞いたことがない、ぜひ一度その子に会わせて欲しい、って」

ルシィは風のラインメイジである。精神的に成熟している彼女は魔法を覚えるのが早く、ジョンキーユの娘は神童であるという噂がトリステインの貴族たちに広まっていた。

口さがない者たちは情緒不安定であるルシィをさし「呪われたことで力を得ている」とか、「亜人の混血ではないのか」などと言うこともあった。だが、それでも幼い鬼才を一目見たいというメイジは少なからずいた。

「ドレスなども、着なければいけないんですよね」

「そう、なるわね」

自意識が男であるルシィは、それを聞いて暗澹とした気持ちになった。二人の会話をそばで聞いていた新人のメイドが、勘違いして口を開く。

「お嬢様はとても可愛らしいので、きっとお似合いになると思いますよ！」
「……っ」
思わずメイドをにらんでしまうルシィ。ルシィが女扱いを嫌がることを知る古株のメイド達は、慌ててその新人を叱りつけ、部屋から叩き出した。怒ったルシィが放つラインスペルの巻き添えになりたくなかったのだ。
ルシィは情緒不安定でこそあるものの、癇癪を起こして人を攻撃するほど子供ではない。使用人達の警戒は過剰であったが、それも仕方がないか、とルシィは内心で納得していた。
自分は今でもずっと前の世界のことが忘れられない。脳ではなく魂に記憶が刻み込まれてしまったかのように、忘れることが出来ない。どうにかして現状を受け入れなければならないのに、心があちらの世界にあるまま、不安定に揺れ動いているのだ。
「ごほっ……どうかしら、ルシィ……」
ルシィはこの頃ますます病気がちになってきた母を見る。
その顔は、年に対して随分と老けて見えた。赤子の頃は艶があり、美しかった銀髪も、今ではただ真っ白な白髪に変わっている。くすみだしている青い瞳が、不安げに自分を見つめていた。
幼い頃からずっと自分の我がままを聞いてくれていた母が、ここまで言うのだ。きっとこれは、ジョンキーユ家のためにも必ず出なければならない催しなのだろう。
母を安心させたい一心で、ルシィは答えた。
「分かりました、母上。その舞踏会に出席しましょう」
ルシィは生まれて初めてのおめかしをすることになった。
着付けを担当するのは、先にも挙がった新人のメイドである。使用人たちはドレスを着せられるルシィが魔法で暴れることを恐れ、彼女に役目を押し付けたのだった。
「さ、先ほどは申し訳有りませんでした、お嬢様！　私に出来る限り、精一杯可愛らしくしてみせますので！」
「……ああ、はい。何でもいいので、早くしてください」

やはり何か勘違いしている新人のメイドに対し、ルシィはげんなりと答える。
前世を忘却出来ないという特性によるものか、ルシィの心は十年経っても高校生男子のままだった。もちろん女装の趣味などなく、可愛らしくされたところで嬉しいわけもない。
ぼうっとしたまま、メイドのなすがままになるルシィ。ドレスを着せられ、髪を結われる。
「出来ました！　わぁ、本当に可愛い……お人形さんみたいですよ、お嬢様！」
そうですか、とつれなく答えるルシィに、メイドが姿見を用意しだす。
「ほら、見てください！」
思わず顔をしかめる。
ルシィは鏡が嫌いだ。何しろ、自分の姿が映っていない。彼女にとって自分の姿というのは、十五歳の男子高校生だった時の、あの平凡な姿である。特別好きな顔というわけでもないが、それでも慣れ親しんだ自分の顔だ。それが映らず、あの子供とは思えないほど陰鬱な顔をした三歳児が映った時は、これは何の怪談かとパニックになって思わず魔法で鏡を叩き割りさえした。
そんなトラウマから、ルシィは今までろくに鏡を見たことがない。が、いい加減こういったことにも慣れていかなければならないのだろうと、ルシィは恐る恐る目を開けた。
「え」
そして、目を見開いた。
そこに映っていたのは、見惚れるほどの美少女だった。
天使みたいだ、とルシィは思った。
キラキラと輝く銀髪。空の色に似た青の瞳。ハルケギニアに住む人々のコーカソイドに似た面立ちは、日本人の感性を持つ彼女には実際の齢（よわい）よりいくらか大人びて見えた。
メイドの言うように、人形のように整った容姿はやや憂いを帯びているものの、それでも一目見て分かるほどに可愛らしく、美しい。ル

シィは心臓をライトニング・クラウドでぶち抜かれたような衝撃を受けた。
「――この鏡に映ってる子、めちゃくちゃかわいい」
「え、あ、はい。そうですね、お嬢様！　とっても可愛いです！」
「これ、誰ですか……？」
「いえ、ルシィお嬢様ですよ？」
「これが……」
ルシィは自分の姿を眺め、感嘆のため息をつく。
「……」
すっ、と心の中の闇が晴れる。
今までずっと、自分が自分でなくなったことが怖くて怖くて仕方がなかった。だが、今映っているこれが自分だというのなら、今まで自分は一体何を恐れていたのだろう。今までの自分を馬鹿馬鹿しく思うほどに、その少女は美しく、可憐だった。
ルシィは思わず母に謝り、そして感謝する。今までずっと、母が与えてくれたものは愛だけだと思っていた。しかし、こんなすぐそばにもう一つの贈り物があったことに、ルシィは今になって初めて気づいた。
「お、お嬢様？　何を……」
メイドが見る前ことなど気にもとめず。
「ん……」
――ルシィは鏡の自分に口づけをした。
子供の冗談のようなそれが、彼女にとっての契約だった。
今日からこの自分を受け入れるという、彼女なりの誓いだった。
心の中で、ずっとしがみついていたものに別れを告げ、彼女は彼女に感謝を捧げる。
「……ありがとうございます、ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユ」
ようやく、地球に置き去りになっていた心が、ハルケギニアに追いついた気がした。

そして時は流れ、五年後。
十五歳となり、前世の年齢に追いついたルシィは、トリスティン魔法学院にいた。
あの日からルシィは変わった。
不安定だった情緒は落ち着きを見せ、周囲とも積極的に関わるようになった。
子供らしからぬ陰鬱さと自暴自棄は鳴りを潜め、自分を大切にし始めた。
断固として拒否していた淑女教育にも自分から取り組むようになり、魔法に関してはより一層の研鑽を積む。
母譲りの美しさを存分に発揮し、自らをより輝かせんとする様は、まさに理想の淑女。
同年代よりやや高い身長に、スレンダーかつ均整な肢体。輝く銀髪は地球の月に似た色を放ち、青い瞳は蒼穹と見紛わんばかりの鮮やかさ。十五歳になったルシィの姿は、もはや目もくらまんばかりの美しさだった。
ついには風のトライアングルにまで至り、『鏡』の二つ名で魔法学院に名を馳せる彼女、ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユは、今

――――

「ルシイ！　ルシイ！　ルシイ！　ルシイぅぅうううわぁああああああああああああああああああああああん!!!　あぁああああ……ああ……あっあっー！　あぁああああああ!!!　ルシイルシイルシイぅううぁわぁああああ!!!」
――色々と拗らせすぎて、大変なことになっていた。
「ああ、可愛い……ルシィちゃん可愛い……僕可愛い……」

満面の笑みを浮かべ、自室の鏡に頬ずりする、制服姿の銀髪美少女。
この残念な淑女が、五年を経て成長したルシィの姿であった。
五年前のあの日。自分を受け入れたルシィは、自分（ルシィ）を愛するようになった。
冒頭に述べた通り、前世のルシィは女好きであり、ややロリコンの気があった少年である。
”前世を忘却できない”という特性により、転生してから今日まで、ルシィの心は十五歳の男子高校生である前世のままだった。そのため、十歳のルシィを見たルシィは、鏡に映る自分の姿に一目で恋に落ちた。
三歳児の時点では転生後のショックも抜けきらず、流石に性癖的にも刺さらなかった彼女だが、十歳になったルシィの姿はそれはもう愛らしく、彼女のストライクゾーンにギリギリで、しかし勢いよく入ってしまった。よりにもよって自分に恋をした彼女だが、しかしルシィはルシィを愛することで、前世に対する未練をようやく払拭できたのだった。
それからというもの、ルシィは自分を磨くことに執心した。ルシィにとって、ルシィは前世に囚われる自分を救ってくれた恩人である。彼女の美しさを高め続けることは、彼女の今生における義務であり、使命だった。
そうして、前世の意識を完全に保ったままルシィを愛するようになったルシィは、それはそれは拗らせた。何しろ、極上の美少女が誰よりも何よりもすぐ近くにいるのだ。彼女は自分を救ってくれた恩人で、決して自分を裏切ることなく、そして自分の意思に完全に応えてくれる。
こんなの好きにならない方が無理という話だ、と、ルシィは事あるごとに思う。
「ルシ――痛いっ！　何するんですか、ナスト！」
ルシィは自分に体当たりをかましてきた小動物を睨む。
大きな青い目をしたイタチのような生き物が、白けた半目でルシィを見下す。

ナストと呼ばれたこの幻獣は、『サモン・サーヴァント』によって召喚されたルシィの使い魔。種族名をエコーと言い、先住魔法による変身が可能な古代の幻獣である。野生では枯れ葉などに化けて人間の目に付くことを避ける、臆病な気質の生物だった。

青い目のイタチは、主人を窘めるように彼女の胸元のペンダントをてしてしと叩く。

母の形見であるそれの存在を突きつけられ、ルシィは慌てたように身だしなみを整える。

「で、でも、別にいいじゃないですか。どうせ他に人もいないんだから……部屋でぐらい好きにさせてくださいよ、もう」

ルシィはぎゅっと母の形見を握りしめる。

元々病気がちだった彼女の母は、一年前に他界した。心労をかけとおしだったルシィだが、元気になった娘を見る母の死に顔は穏やかだった。……微妙に心残りがある感じの顔ではあったが。

「けれど確かに、そろそろ寝る準備はしておいた方がいいですかね……。明日の朝は確か、ギトー先生の授業でしたから。一年生の時は授業が受けられませんでしたもん」

風のスクウェアメイジ、『疾風』のギトーに対する期待を膨らませながら、彼女は就寝の準備をする。

「楽しみですね、ナスト。良い先生だったらいいですね」

使い魔に微笑みかけながら、ルシィは部屋の明かりを消す。

その直前、ちらりと部屋の姿見を見た。

ルシィの好みに合わせて磨き上げた、銀髪青眼の美少女。ルシィにとってルシィは完璧であり、欠点などあるはずがない。だが、強いて、一つだけ不満をあげるなら――

「鏡の中から出てこないってところなんですよね」

困ったものです、とルシィは呟く。主人を見るナストの目は白々しげだが、ルシィが気にした様子はない。

無論、こんな不満は言いがかりも良い所だ。少なくとも、ここが地球だったならばそうだ。

しかし、このハルケギニアには魔法がある。

「『偏在(ユビキタス)』だけは絶対に覚えたいですね、ナスト」

自らの分身を作り出すスクウェアスペルに夢を見て、彼女はベッドの上で目を閉じた。

02_木霊の幻獣

何か、少年の絶叫のような声が聞こえて、ルシィは目を覚ました。
「……真夜中に起きてしまったんですが」
むくりとベッドから身体を起こす。見れば、使い魔であるナストも目を覚ましてしまったらしい。青い目をぱちくりと瞬かせながら、周囲をきょろきょろと見渡していた。
早寝をしたおかげで眠くはないが、流石にこの時間に起きるというのは早すぎる。
暗い部屋の中、ルシィは夜空に浮かぶ月を見た。赤と青、二つの月である。
この月を素直に綺麗だと思えるようになってから、五年が経った。未だに前世の記憶はルシィの心に完全な形で残っているが、それでもこのハルケギニアで生きることを受け入れられる程度には、ルシィも精神的に成長していたのだった。
ルシィはなんだか寝直す気分でもなくなってしまい、部屋の明かりをつけた。寝直すつもりだったナストは小さくうめくような鳴き声をあげたが、ルシィに木の実を渡されて機嫌を直した。
こんな深夜では、さして出来ることもない。ルシィはどうやって暇を潰すか悩むものの、彼女のする暇潰しといえばたった二つだけしかない。
すなわち、魔法の修行と、自分（ルシィ）を愛でることである。
「せっかくですし、どっちもやりましょうか」
ルシィは杖を構えた。
当然、攻撃魔法を放つつもりなどない。今から唱えるのは、この五年で編み出したルシィ独自の魔法である。
精神力を込め、呪文を詠唱する。そして唱え終わると同時、陽炎が揺らめくようにしてルシィの目の前にルシィの姿が現れた。
それは『偏在』ではない。この魔法で現れたもうひとりのルシィは形ある分身ではなく、ただ空気を歪めて生み出された幻である。
これは風属性の『遠見』を改良して作った魔法で、ルシィが『鏡』の

二つ名を得る由来となる魔法でもあった。
「うへへぇ……」
ルシィはルシィの姿を眺め、やっぱり可愛いなあ、と顔をだらしなくほころばせる。しかしそんな締まりのない表情でさえ愛らしいのだから、美少女というのはなんとも得なものであった。
ルシィは幻を眺めながら、ぐるりと部屋の中を回る。この『鏡』の魔法は本物の鏡と違い、三百六十度どこからでも自分の姿を眺めることが出来る。その上、本体と違う姿勢を取らせることさえ出来るのだ。自分の姿を見るにはこれ以上無く便利な魔法であった。しかし

「……おっと」
思わず幻に指先を触れてしまうルシィ。瞬間、幻は崩れ、消滅した。
この魔法の欠点を言うならば、幻がただひたすらに脆いことだった。話に聞く『偏在』の分身とは比べ物にもならない強度の低さ。『偏在』と違って幻が自律的に動くことも出来ず、魔法を撃つことなど当然不可能。自分（ルシィ）と触れ合いたいルシィとしては、甚だ不満な代物であった。
「ナスト、ナスト。久しぶりに手伝ってくれませんか？」
青い目の小動物が面倒くさそうに首をもたげる。使い魔は呆れたような仕草で木の実を呑み込み、しかし主人の求めに応じて部屋の中心に移動した。
小さく鳴き声を上げるナスト。精霊に呼びかけんとする、澄んだ高い鳴き声。
エコーが持つ先住の魔法が体を歪ませ、おぼろげな人型へとその形を変じさせた。
見ようによってはルシィと言えなくもない姿だが、それはぐらぐらとゆらめき、どうにも不安定である。これならば先ほどの『鏡』の魔法の方がまだマシという有様。
「慣れてくれれば上手く化けれるかと思いましたけど、そうそう上手くはいきませんよね……」
そも、エコーの〝変化〟は無生物に化けるのが専門であるため、人

に変身した際の完成度が低いのは仕方が無い。完全に人間に化けようとするならば、それこそ風韻竜並の高度な幻獣でなければ無理という話だった。
ルシィはむぅと口元を歪め、また別の魔法を唱える。
風の二乗に水を足した合成魔法。人間の顔を変えるスクウェアスペル、『フェイス・チェンジ』。それを彼女なりにデチューンし、トライアングルスペルへと調整した魔法だった。
詠唱が完了し、揺らめいていたルシィの姿が安定する。
現れたのはルシィとそっくりな少女の姿。煌めく銀髪のサイドテールに、空色の瞳持つ美しいかんばせ、スレンダーでしなやかな肢体。表情だけはどこか胡乱げだが、それもまた新鮮だとルシィは胸は高鳴らせた。
「よしよし……！　ナスト、動いてみてください、ゆっくりですよ、ゆっくり。魔法が解けたら困りますから……あっ、可愛……オーケーオーケー、そのまま笑ってください、僕に笑いかけてください、ほら、ニコーって！」
ナストは懸命に変身を維持しながら、曖昧な笑みを浮かべる。その笑顔にルシィは心臓を打ち抜かれ、黄色い声を上げて目の前の自分に飛びついた。
「ああっ、僕のルシィ！　やっぱり可愛いよルシィ！　ルシィルシィルシィぅううわぁああ――って、ありゃ」
いつの間にか魔法は解け、ルシィはイタチの顔に頬ずりしていた。
「でもナストも可愛いですよ、ルシィの次に」
ルシィはそのままナストへと頬ずりする。
主人の言い分に呆れるナストだが、何だかんだで使い魔はご主人様のことが好きなもの。可愛がられる分にはまあまんざらでもないのであった。

そしてようやく日が昇り、朝。

ルシィは身だしなみをばっちりと決め、トリステイン魔法学院の制服を身に纏っていた。
「ナスト、おいで」
自身の使い魔に呼びかける。
ナストはルシィの首元へと飛び込み、〝変化〟した。青い目の小動物が美しい繕いのマフラーへと変わり、少女の首へと優しく巻き付く。
ルシィは『サモン・サーヴァント』でナストを召喚してからというもの、時折その姿を様々なアクセサリーに変え、好んで自身に身に着けるようになった。
ナストの方もこれには乗り気で、貴族でも手に入れられないような素晴らしい装飾品に姿を変え、ルシィを度々喜ばせる。そんな彼女らの最近のお気に入りが、この鮮やかな寒色のマフラーであった。
部屋を出て校舎に向かうルシィ。他の生徒達が「ミス・ジョンキーユが日毎に身につけているあの装飾の数々は、一体どこから来ているのだろう」と不思議そうに噂するのを聞きながら、まだ人の少ない教室へと歩いていった。
教室に入ったルシィは、おや、と軽く眉を上げる。まだ早い時間であるというのに、教室には青い髪と瞳を持つ小柄な少女がいた。ルシィの級友の、『雪風』のタバサである。
ルシィはタバサを見て、ううむと唸る。微妙にロリコンであるルシィにとって、タバサの外見は非常に好みな部類に入る。入学直後、彼女の読書中に「タバサは幼女みたいで可愛いね」と言って、魔法で勢いよくぶっ飛ばされたのはひどく記憶に残る思い出だった。
今では反省しているルシィであるが、それはそれとしてタバサは可愛い。風系統のトライアングルメイジという共通点もあって、勝手に親近感を感じてもいるルシィであった。
ルシィは少女の横顔をじっと眺めていたが、次第にその読んでいる本へと興味が映り始めた。
タイトルは『古代の魔道具』。その一ページに、スキルニルなる魔法の人形のことが記されていた。過去の魔法使いが作った小魔法人形（ヴィー）

で、人間の血を与えるとその人間そっくりになるらしい。
ルシィにとってはなんとも興味深い話だった。もしこれから先どうしても『偏在』が覚えられなければ、なんとしてでもスキルニルを手に入れることにしようと心に決めた。
タバサがページを進めてしまったので、彼女から離れ、自分の席へと向かう。
手鏡に自分を映しながら、席について授業が始まるのを待つルシィ。クラスメイトが次々と集まってくる中、ピンクブロンドの少女が教室にやってきた。ルシィの級友、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールである。
彼女は十六歳にしては多少小柄であるものの、顔の造形に関して非常に整っている。それこそ天下に冠する美少女と言って差し支えない美しさだった。
自分に絶対の自信を持つルシィだが、悔しいことにルイズに対しては自分と互角、否、互角以上に美しいと認めざるを得なかった。ルイズはちっちゃくて可愛いので仕方がなかった。
そんなルイズが教室に現れたのを見て、級友ともどもルシィは目を丸くした。なにやら、ボロ切れのようなものを、鎖につないで引きずって入ってきたからだ。
「あなた、何を引きずっているの？」
「使い魔よ」
『香水』のモンモランシーに問われ、答えるルイズ。
大きく腫れ上がった顔と、こびりついた血で原型を留めていないが、それは確かに彼女の使い魔――平賀才人と呼ばれる物体だった。首と両手首に鎖を巻きつけられ、まるでゴミ袋のようにルイズに引きずられているのであった。
ルシィは可哀想に、とひどく同情した。
名前から分かる通り、平賀才人は前世のルシィと同じ世界の住人、地球出身の日本人である。なぜか春の使い魔召喚でルイズに召喚されてしまい、ルイズの使い魔としてこのハルケギニアで過ごすことを余儀なくされているのだ。

「やめてあげてください、ルイズ」
ルシィはルイズを窘めた。
自分を知る者が誰もいない、全く違う世界に迷い込んでしまうつらさは身に沁みて知っている。彼女から見て、才人はとてもよく頑張っていた。自分のように泣きわめきもせず、文句を言いつつもこのハルケギニアでどうにか生活しているのだ。こんな風に痛めつけられる謂れは無いと、非難がましい目でルイズを睨む。何やら威圧感のある視線に、ルイズはうっと怯んでしまった。
「才人が何をしたのか知りませんが、こんな乱暴はあんまりです。待っててください、今『治癒』で治してあげますから」
ルシィは才人の頭を撫で、微笑んだ。同郷の人間に対するよしみである。
「才人は頑張ってますよ、偉いですね。安心していいですよ、僕は君の味方ですから」
優しい声で才人を励ますルシィ。才人は、彼女の『治癒』で身が癒えていく感覚も相まって、「この子、俺のことが好きなんじゃなかろうか」と疑った。否、疑ったのは一瞬で、次の瞬間には確信した。才人を見るルシィの目があまりにも優しかったからだ。
こりゃ絶対に俺にほの字だ。昨日の夜にルイズに抱きついた時は勘違いだったが、今度こそは間違いない。才人は勢いよく鎖を振りほどいてルシィに抱きつき、頬をぐりぐりと擦り寄せた。全く惚れてなどいないルシィは悲鳴を上げた。ついでに、マフラーとして一緒に巻き込まれたナストも密かに鳴き声を上げた。
「何すんだテメェ！」
次の瞬間には淑女らしからぬ罵声とともにグーで才人をぶん殴り、追撃とばかりに弱めのウィンド・ブレイクで才人を教室の端までぶっ飛ばす。
怒りで顔を真っ赤にする元男の銀髪少女。才人には同情するが、男に抱きつかれ、あげく頬まで擦り寄せられる趣味など無いのだ。愛しのルシィに触れていいのは自分ただ一人なのである。
ルイズは冷え切った目で才人を見ながらルシィに言う。

「このバカ犬、昨日も私のベッドに忍び込んで、同じことをしたのよ、ルシィ」
「最低ですね。もう檻にでも閉じ込めておけばいいんじゃないでしょうか」
どこの異世界であろうが、強姦を許容する法は無いのだ。ルシィはふんと顔を逸し、席につく。昨夜に続いてまたも同じ失敗をした才人は、がっくりと項垂れて落ち込むのだった。

03_偏在の教師

そんな一騒動の後に始まった『疾風』のギトーの授業だが、始まってすぐに、ルシィはどうにもむかむかした気持ちになってしまった。ギトーが、ルシィの級友である赤髪の美女、『微熱』のキュルケを吹き飛ばしたからだ。

『疾風』のギトーは、まだ若いのに不気味さと冷たい雰囲気を持つ男の教師である。彼は自分に向けて魔法を放ってみるように挑発し、キュルケが放った火の玉ごと、彼女の身体を烈風で吹き飛ばしたのだ。

それでせめて一言キュルケを心配するなり、気落ちするならいいものの、ギトーはまるで気にした風もなく話を続けている。

ルシィは気に食わなかった。キュルケは美少女であり、美少女とはすなわちあらゆる世界における宝である。それを大事にしない。自らも美少女であると自負するルシィにとって、決して許せることではなかった。

ギトーに対する期待が一気に落ち込んでしまうルシィだが、どうにか堪えて話を聞く。

トリステイン魔法学院は大きな学校だが、それでも風のスクウェアである教師などそうそういるものではない。これで人格者であることまで求めるのは流石に望みすぎというものだ。ルシィもそれは理解している。しかし、腹に据えかねることばかりは止められなかった。

「目に見えぬ『風』は、見えずとも諸君らを守る盾となり、敵を吹き飛ばす矛となるだろう。そしてもう一つ、『風』が最強たる所以は……」

ぴくり、とギトーの言葉に反応するルシィ。

むかむかとする気持ちはあれど、『偏在』に対する興味は止められない。ルシィの期待に応えたわけではないだろうが、低く、呪文を詠唱する声が教室に響く。

「ユビキタス・デル・ウィンデ……」

しかしそのとき……、教室の扉がガラッと開き、緊張した顔のミス

タ・コルベールが現れた。
「あややや、ミスタ・ギトー！　失礼しますぞ！」
「授業中です」
「おっほん。今日の授業は、すべて中止であります！」
ルシィはがっくりとする。せっかく『偏在』が見られるところだったのに、良いところで邪魔が入った。
何でも、トリステインの王女を歓迎する式典があるらしい。
それほど大げさにする必要があるのかと思うルシィだが、日本で例えれば天皇や皇太子が学校にやってくるようなものだ。なるほど、それは一大事となっても仕方ない。ルシィは諦めて生徒の列に並ぶ。
しばらくして、学院の正門へと王女がやってくる。馬車から降りてきたアンリエッタ姫殿下はなんとも美しかった。にっこりと浮かべられる薔薇のような微笑。ルシィの隣に立つキュルケは、つまらなさそうに鼻を鳴らした。
「あれがトリステインの王女？　ふん、あたしの方が美人じゃないの」
キュルケは地面に転がっている才人へと尋ねる。
「ねえ、ダーリンはどっちが綺麗だと思う？」
しかし答えたのは才人ではなくルシィだった。
「キュルケもお姫様に負けず劣らず綺麗ですよ」
「あんたには聞いていないのよ、ルシィ。どうせあなた、何を言ったところで結局自分が一番だと思ってるじゃない」
「そりゃそうでしょう、僕が一番の美少女なんですから。ですよね、才人？」
そばで聞きながら呆れる才人。実際の美しさに関しては三人とも甲乙つけがたかったが、こと自信という面で言えば間違いなくルシィが一番だと確信する。才人は面倒くさくなったので、適当にルイズから言いつけられた犬の鳴き真似で答えることにした。
「わん」
「わんじゃわからないですよ。ほら、ルシィちゃん可愛いって言ってくださいよ、ねえ」
才人はルシィを無視してルイズの方を見た。ルイズは真面目な顔

をして王女を見つめている。そうしていると、なんとも清楚で美しく、華やかなルイズである。そっぽを向かれ、ルシィはむっと唸った。
別に才人に好かれたいわけではないが、自分の愛する人(ルシィ)を無視されるのは面白くない。そしてこれが他の女の子ならまだしも、相手が唯一自分より可愛いと思うルイズである。文句も言えずルシィは押し黙った。このハルケギニアでは体型の面でいまいち人気のないルイズだが、才人と言いルシィと言い、どうもこのピンクブロンドの少女には日本の一般的男子を引き寄せる魅力があるようだった。
そうして彼らの見ていたルイズの横顔が、はっとした表情になる。それから顔を赤らめる。
彼女の視線の先には、羽帽子を被った凛々しい貴族の姿があった。ルイズは明らかにその貴族を意識していて、才人は思わず唇を尖らせた。
いいもん、と才人は思った。俺にはキュルケがいるもん。胸の大きい赤毛の女の子。しかしキュルケもルイズと同様、顔を赤らめて同じ羽帽子の貴族を見つめている。
「みんな美男子が好きなんですねえ」
どうでも良さげに言うルシィ。才人はおっ、と感心の声を上げる。
キュルケはそんなルシィに対し、理解出来ないという風に言った。
「美男子なだけじゃないわ、あれは多分魔法衛士隊の隊長よ。顔が良い上に強いの。大したものだわ」
「顔が良いのも強いのも大事なことじゃありませんよ。本当に偉いのは頑張ってる人です。それだったら才人の方がずっと大したものです」
これはお世辞ではない彼女の本心である。
召喚された翌日の才人なんて、魔法も使えないのに土メイジの男子生徒に決闘を挑み、何度ぶっ飛ばされても立ち上がり、挙げ句の果てにはずたぼろになって勝利をもぎ取っていた。これは、平和な日本で生きる高校生にはそうそう出来ることではない。少なくともルシィには出来ない。本当に大したものだ。彼は心が強く、勇敢である。ルシィは腕を組み、内心で深々と頷いていた。

そんなルシィに才人はきゅんと来る。よ、よよ、よし、ルイズからルシィに乗り換えてやろうかな、と思った。
しかし、そこで座って本を読んでいたタバサが言った。
「ワルド子爵は、『風』のスクウェア」
「えっ」
そう聞いた途端、ルシィは興味を持ってその貴族、ワルド子爵を見つめはじめた。
それは色恋とは全く無関係な視線だったが、才人は完全に勘違いしてしまい、落ち込んで地面にへたり込むのだった。

その日の夜。
寮の廊下には、ため息をつく銀髪の少女がいた。
「やっぱり魔法衛士隊の隊長ともなると、色々忙しいんですね」
あの後、ルシィはワルド子爵に教えを乞おうとした。しかしそれらがことごとく空振りに終わり、少し落ち込んでしまっていたのだ。
ギトーの授業はまた少し先だ。それに、出来るならあの不気味な男より、見るからに人格者なワルド子爵に教師となって欲しい。ルシィは顎に手をあてううむと悩む。どうにか彼と接点を持ちたいと考える彼女だが、ワルド子爵に渡りをつけられる知り合いなど……
「あ、そうだ、ルイズに聞いてみましょう」
ワルド子爵を熱心に見つめていたし、もしかしたら知り合いかもしれない。ただ美形に見惚れていたという線もあるかもしれないが、なんとなくそうではない気がした。
ルイズの部屋へと向かうルシィ。だが、級友の部屋の前に、薔薇の造花を持った一人の男子生徒がいた。彼は部屋の扉に耳を当て、真剣な顔で聞き耳を立てている。うわぁ、と思いながらルシィはどん引きした。
「……何をやってるんですか、ギーシュ」
「しっ、静かに、ルシィ！　これは大事なことなのだ！」

「女子の部屋を盗み聞きすることがですか？」
ルシィは呆れてため息をついた。
彼の名はギーシュ・ド・グラモン。才人と決闘した土メイジの男子生徒である。気障な性格のプレイボーイで、平気で女性に二股をかけるような男でもあるが、ルシィはギーシュのことがそんなに嫌いではなかった。
「そんなことをするぐらい暇なら、また僕の銅像でも作ってくださいよ。その方がよっぽど有意義ですよ」
「ぼくはきみ専属の彫刻家などではないのだがね、ルシィ」
というのも、彼が一度ルシィの像を魔法で作り、プレゼントしたからであった。ギーシュの得意魔法である『ワルキューレ』――戦乙女のゴーレムを作る要領で作られた、ルシィそっくりの像である。
並の女子なら正直どうかと思うであろう代物だったが、あいにくルシィは並ではない。ギーシュが作った自分の像をいたく気に入り、ギーシュに感謝の言葉を雨あられと浴びせかけ、これから仲良くしようとハグまでした。ただし、その後に放たれたギーシュからの求愛の言葉はすげなく断ったが。
ルシィはギーシュの様子から部屋の中が気になり、耳を澄ませる。
ギーシュのように扉に張り付くようなことはせず、ただ廊下に立って部屋の方に向かい合うのみだ。
しかし、風メイジとは得てして音に敏感なものである。彼女の耳には難なく部屋の中での会話が聞こえてくる。それはなんとあのアンリエッタ姫殿下と、級友たるルイズが親しげに話し合う声であった。彼女らは真剣な声音で、何か重要らしきことを喋っている。
――ウェールズ皇太子を捜して、手紙を取り戻してくれれば良いのですね、姫さま――
――ええ、そのとおりです。『土くれ』のフーケを捕らえたあなたたちなら――
何やら、王女の大事な手紙をルイズが取ってくることになったらしい。行き先は『白の国』アルビオン。王家と反乱勢が骨肉の争いを繰り広げている物騒な国だ。

――頼もしい使い魔さん。わたくしの大切な友達を、これからもよろしくお願いしますね――
何やら、アンリエッタは才人にも話しかけていた。優しいお姫さまである。才人は色々と大変な思いをしているので、ぜひ褒めてやってほしい、とルシィは思った。
――そんな、使い魔にお手を許すなんて――
――お手を許すって、お手？　犬がするやつ？――
――違うわよ。お手を許すっていうのは、キスしていいっていうことよ。砕けた言い方をするとね――
――そんな、豪気な……――
才人の声の調子に、何か不穏なものを感じるルシィ。
そして直後。ルイズの怒りの声が、聞き耳を立てるまでもなく扉の外に響いた。
どうも、才人はアンリエッタの唇にキスをしたらしい。こいつ馬鹿じゃねえのか、とルシィは思った。
「きさまーッ！　姫殿下にーッ！　なにをしてるかーッ！」
耐えきれなくなったらしいギーシュが、部屋の中に飛び込んだ。
「ギーシュ！　それに、ルシィ！　あんたたち、立ち聞きしてたの？　今の話を！」
このままこっそり帰ろうと思っていたルシィだが、もたもたしている内にルイズに見つかってしまった。うへぇ、と内心で声を漏らす。
才人がギーシュを蹴り回して喧嘩する中、アンリエッタが困ったように呟く。
「今の話を聞かれたのはまずいわね……」
ギクッとするルシィ。こんなのの巻き添えにあって縛り首になるのはまっぴらごめんだった。
「姫殿下！　その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せ付けますよう」
「え、あ、じゃあ、僕――いえ、私、ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユもまた、その任務に参加したく思います。はい」
思わずギーシュの言葉に乗っかるルシィ。それを聞いたアンリ

エッタが、きょとんとした顔で二人を見つめる。
「グラモン？　あの、グラモン元帥の？」
「息子でございます、姫殿下」
「それにあなたは、ジョンキーユ伯爵の……。確か、十歳にも満たない内にラインスペルを操ったという」
「ぼ……私のことを知っているのですか？」
「ええ、もちろん。あなたは幼い時からその……凄まじい鬼才として有名だったので」
　微妙に言葉を濁すアンリエッタ。ルシィは顔を赤くして頬を掻く。
「それは……非常にお恥ずかしい限りで……」
「いえ、子供の頃の話は、誰もみな恥ずかしいものです」
　アンリエッタはそう言うが、あいにく、ルシィは幼少期から十五歳の少年としての意識を持っている。子供だったからという理由では、自分の痴態を許すことが出来ないのであった。
　思い返せば、あの頃の自分はなんとも無様なものだった。見知らぬ異世界に来ても涙一つ見せない才人を見た後では、特にそう思う。
　ルシィのもじもじとした口調に、アンリエッタは儚く微笑む。
「ありがとう。お父さまも英明で高潔な貴族ですが、あなたもその血を引いているようね。どうかこの不幸な姫をお助けください。ルシィさん」
「……はい」
　父を引き合いに出され、ルシィは思わず顔をしかめかける。
　亡き母ならばともかく、あの冷酷で潔癖な男に例えられるのは、どうにも腹に据えかねるものがあった。
　ルシィが密かに心を濁らせる中、アンリエッタはルイズにその場でしたためた密書と、『水のルビー』なる宝石を手渡し、祈るようにルシィたちに言う。
「この任務にはトリステインの未来がかかっています。母君の指輪が、アルビオンに吹く猛き風から、あなたがたを守りますように」

０４―一行の道程

朝もやの中、ルシィは馬に鞍をつけていた。
それは随分と手慣れた様子で、どうにもやり方が覚束ない才人に教える余裕さえあった。
元が日本人であるルシィだが、仮にもこの世界で十五年貴族の令嬢として過ごしたのだ。乗馬の嗜みぐらいは当然にある。
「お願いがあるんだが……」
「あんだよ」
「ぼくの使い魔を連れていきたいんだ」
そうしていると、ギーシュが言った。
ギーシュの使い魔を今まで見たことがなかったので、にわかに興味を持つルシィ。なお、彼女の使い魔であるナストは今日もマフラーとしてルシィの首に巻き付いていた。
地面を足で叩くギーシュ。すると、地面がモコモコと盛り上がり、モグラが土から顔を出した。並のモグラとは比べ物にならないほど巨大で、大きさがクマほどもある。ジャイアントモールと呼ばれる生き物であった。
「ヴェルダンデ！　ああ、ぼくの可愛いヴェルダンデ！」
膝をついてジャイアントモール――ヴェルダンデを抱きしめるギーシュ。
ルシィはなんとなくマフラーを撫でる。その猫可愛がり（モグラだが）は、ルシィのナストに対する態度と似たものがあった。使い魔は主人が好きだが、主人も大概使い魔が好きなものである。
「ヴェルダンデ、君はいつ見ても可愛いね、困ってしまうね。どばどばミミズはいっぱい食べてきたかい？」
モグモグモグ、とヴェルダンデが嬉しそうに鼻を震わせる。いやいくらモグラでもそんな鳴き声があるか、とルシィは内心で突っ込んだ。同意を求めるように才人の方を見るが、彼の方は何とも思っていないらしい。異世界なら何でもありだと思っているのかもしれない。
モグラのヴェルダンデはちらりとルシィを見た。なんだろう、と首

を傾げるルシィ。
　使い魔はモゴモゴと口を動かし、頬袋から何かを吐き出す。よだれに濡れた小箱が地面に落ちた。
「……これ、僕に？」
　こくりとヴェルダンデが頷く。……このよだれまみれの箱を開けろというのか。
「うえぇ……。ちょっとギーシュ、代わりに開けてくださいよ」
「いいとも」
　ギーシュは即答し、手をベトベトにしながらも嫌な顔一つせず箱を開けた。浮気性だが、女の子には優しい彼である。
　こいつ良い奴だなあ、と思いながら、ルシィは箱の中の物を取り出した。
　それは、一枚の便箋に綴られた手紙だった。
「……」
「何の手紙だったんだ？」
「……別に。つまらない内容でしたよ」
　ルシィは手紙をくしゃくしゃと丸め、箱の中に戻す。
　手紙に書かれていたのは、ルシィの父であるジョンキーユ伯爵からの通達である。
　そう、連絡ですらなく、通達。
　――早く学院から戻って、嫁に行けという、父からの命令だった。
「……ふん」
　ルシィは途端に不機嫌になる。
　外面は淑女らしくなったルシィだが、中身は未だ前世の意識を色濃く残したまま。女として結婚するなどありえない。それに、手紙の内容も酷いものだった。
『トライアングルにまでなれば十分だろう、もしスクウェアにでもなってしまえば貰い手がいなくなる』、なんて……娘をなんだと思ってるんでしょうか」
　ただの道具としか思っていないのだろうな、とルシィはため息をつく。

タバサやキュルケなどのトライアングルが身近にいるので忘れそうになるが、実際、彼女らは学院においても有数のエリートだ。知識を積めば、魔法学院で教鞭を執ることさえ出来る実力。これ以上となると尻込みする男も多いのもまた、事実ではあった。
「ルシィ……」
その憂いある顔にアンリエッタと似たものを見たルイズは、手紙の内容を察して彼女の肩に手を置いた。しかし、その時である。
「な、なによこのモグラ」
ヴェルダンデが鼻をひくつかせ、くんかくんか、とルシィ達に近寄る。巨大モグラはいきなりルシィ達を押し倒し、鼻で体をまさぐりはじめた。
「わっ……なんですか、こら！　いくら動物だからって、この！」
「や！　ちょっとどこ触ってるのよ！」
ルシィ達は鼻で体を突き回され、地面にのたうち回る。ルイズ共々、パンツを派手にさらして暴れるルシィ。
「いやぁ、巨大モグラと戯れる美少女ってのは、ある意味官能的だな」
「そのとおりだな」
「何バカなこと言ってるんですか！　ルシィちゃんの可愛さはモグラなんぞにくれてやっていいものじゃないんですよ！　……って、ペンダントはもっとダメです！　母上の形見に鼻を擦り付けるな、アホモグラ！」
「この！　無礼なモグラね、姫さまにいただいた指輪に鼻をくっつけないで！」
「なるほど、指輪か。ヴェルダンデは宝石が大好きだからね」
そんな風にルシィ達が暴れていると、突如一陣の風が吹き、ルシィ達に抱きつくモグラを吹き飛ばした。
「誰だッ！　貴様、ぼくのヴェルダンデに何をするんだ！」
朝もやの中から現れたのは、羽帽子を被った長身の貴族である。
「僕は敵じゃない。姫殿下より、きみたちに同行することを命じられてね。きみたちだけではやはり心もとないらしい」
その人こそ、ルシィが教えを乞おうと思っていたワルド子爵であ

る。
なんという僥倖だろう。ルシィは顔に喜色をにじませ、面倒なばかりだと思っていたこの任務に感謝した。
「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」
自己紹介をするワルドに、文句を言おうとしたギーシュが口をふさぐ。流石に相手が魔法衛士隊では分が悪い。それは全貴族憧れの肩書きなのである。
「すまない。婚約者が襲われているのを見て見ぬ振りは出来なくてね」
才人がルイズを見る――のは咄嗟にやめて、ルシィを見る。しかし、ルシィはぶんぶんと首を振った。婚約した覚えなど彼女には無い。いや、既に父が何人か見当をつけてはいるのだろうが、それでもワルド子爵を紹介された覚えはない。
才人はあんぐりと口を開けた。つまり、この、凛々しい貴族が、ルイズの婚約者？
「ワルドさま……」
「ルイズ！　久しぶりだな、僕のルイズ！」
ルイズが頬を染めてワルドに抱きかかえられる。ルシィはそれを見て、なるほどなぁ、と一人思った。何やらワルドと関わりのありそうなルイズだったが、まさか婚約者だったとは。
ちらりと隣を振り向けば、才人は何やらとても寂しそうにしていた。彼の気持ちはなんとなく察しているルシィだが、それでも、これは才人にとって良かったのではないかと思ってしまう。
だって、本当に日本に帰りたいなら、ルイズのことは諦めた方がいいからだ。いや、ルイズというより、この世界の女の子に入れ込んでしまうのがよくないからだ。
もしこの世界の誰かを愛してしまったら、きっと才人は元の世界のことを諦めてしまう。この世界で一生を終えてもいいと思ってしまう。
ルシィは、才人にはなんとなくそうしてほしくなかった。元の世界で死んだ自分とは違って、才人には今も、帰りを待っている家族がい

るのだろうから。
「彼らを、紹介してくれないかね」
「あ、あの……ギーシュ・ド・グラモンと、ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユ。ついでに、使い魔のサイトです」
　そんな風にナーバスな気持ちに浸っていたルシィ、そして他二名を、ワルドに紹介するルイズ。
「きみがルイズの使い魔かい？　僕の婚約者がお世話になっているよ」
「そりゃどうも」
　才人はワルドと二言三言受け答えしつつも、明らかにむすっとしていた。
　気持ちはわかる。ワルドは同性であるルシィから見ても……否、現在は異性なのだが、それでも男だった身として見ても、格好良く、がっしりとしていて、おまけに人間が出来ている。これは悔しくなっても仕方ない。
　でも、いくら悔しいからって自分の方を見られては困る。ルシィは才人から目を離し、ワルドに向けて一礼した。
「初めまして、ワルド子爵。ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユです。学院では『鏡』のルシィと呼ばれています。僕も風のメイジとして、その達人であるワルド様のご高名は拝聴しておりました。お会いできて光栄です」
「ほう、君も風使いか。『閃光』のワルドだ、よろしく頼むよ」
　人の良い笑みを浮かべるワルド。うわあ、本物のイケメンだ、とルシィは思った。多分、そばで見ている才人やギーシュもそう思った。
「この任務には全力を尽くして挑むつもりです。どうか、そのためにもあなたの素晴らしい技の一端を、この未熟な身にご教授いただければ……」
「いいとも。厳しい任務になるだろうが、実戦の場に身を置くことは何よりの修行になる。支障を来たさない範囲で、出来る限りきみに指導しようじゃないか」
「ありがとうございます、ワルド様」

ルシィは、鏡以外には滅多に見せないようなとびきりの笑顔をワルドに向ける。ますますすっとした顔の才人とともに、一行は、アルビオンへと出陣するのだった。

残念ながら、出発してからはワルドと会話する機会さえなかった。ワルドが休むことなく自身の駆るグリフォンを疾駆させ続けたからだ。

ルシィたちは二度馬を交換したが、ワルドのグリフォンは疲れも見せず走り続ける。乗り手に似て、非常にタフな幻獣だった。

乗馬には慣れていると言え、流石の強行軍に疲れてくるルシィ。

彼女は自分の魔法にはそれなりの、自分の美貌には絶大の自信を持っているが、体力に関してはただの少女である。

「こっちは美少女だぞ、もっと丁重に扱え」と内心でワルドに文句を言いながらついていく。いい加減にへばってきた彼女の耳に、グリフォンに一緒に乗るルイズとワルドの会話が届いてきた。

本来なら声が聞こえるような距離ではなかったが、風メイジの聴覚、その中でもルシィの耳はとりわけ音に鋭敏なのである。

「僕はずっときみのことを忘れずにいたんだよ。覚えているかい？僕の父がランスの戦で戦死して……」

何やら、ワルドは熱心にルイズのことを口説いているようだった。こちらがへばっているのに随分と余裕である。

ハルケギニアの人々にはちんちくりんと言われあまり相手にされないルイズだが、ワルドはそんな彼女のことが好みらしい。なかなか見る目がある、とルシィは深く頷いた。才人はワルドとルイズが親しげにするのが気に食わないらしく、近くのギーシュと会話しながら悪態をついていた。

疲れ切りつつも、一行は夜闇に包まれた港町、ラ・ロシェールに到着する。何度も馬を替え、飛ばしてきたせいで、ルシィ達はどうにか

その日のうちに山間にある町の入り口へとたどり着くことが出来たのだった。
「港町なのになんで山なんだよ」
「きみは、アルビオンを知らないのか？」
「知るか」
「まさか！」
才人の言葉に、ギーシュが笑う。しかし、才人とルシィは笑わない。日本人が、否、地球人がまさか、アルビオンがあんな国だとは思うわけがない。ルシィは疲れ切りつつも、才人を弁護しようと口を開けた。
「遠い国の人なんだから仕方ないでしょう。才人、アルビオンはですね……」
そのときだ。
不意に、ルシィ達にめがけて、崖の上から何本もの松明が投げ込まれた。
火の訓練を受けていない馬が暴れ、地面に投げ出されるルシィ達。続いて放たれる何本もの矢。
それらは初撃ゆえに運よく外れたが、二の矢が続けて降りかかってくる。転がっていたルシィは、慌てて風の呪文を唱えた。竜巻が生まれ、矢を明後日の方向へと弾き飛ばす。
が、急なことだったので全ての矢を防ぐことは出来なかった。ギーシュの方に一本の矢が飛来する。しかしそれは、もう一つの竜巻によって弾かれた。
「大丈夫か！」
ワルドが叫ぶ。彼もまた、ルシィ達を助けようと杖を構えていたのだ。才人がうめきを漏らしつつも、どうにかこらえて返事をする。
「だ、大丈夫です……えっと、今の」
「いや、君を助けたのは僕ではない。彼女だ」
才人は後ろを振り返った。ルシィが倒れたまま、苦し紛れの笑いを浮かべて手を振る。
ルイズの婚約者に助けられたのではなくてほっとした才人だが、そ

れでも女の子に助けられてしまった。才人の中で情けない気持ちが溢れる。自らも戦うべく、背中の錆びた大剣、デルフリンガーを引き抜いた。
「相棒、寂しかったぜ……鞘に入れっぱなしはひでえや」
喋りだすデルフリンガー。この剣はインテリジェンス・ソードと呼ばれる珍しい武器であり、剣でありながら人並みの知性を持っているのだ。ただし、古ぼけてしまっているので色んなことを忘れている。
「夜盗か山賊の類か?」
ワルドが呟き、ルイズが反応する。しかし、ルシィとしてはもうへとへとで、もう何でも良いから勘弁してほしかった。
そのとき、ばっさばっさと羽音が聞こえた。
ルシィは首を傾げるが、どうやら才人達には聞き覚えのある音らしい。
崖の上の襲撃者達は自分たちの頭上に現れたものに怯え、矢を撃つ。しかしそれらは竜巻で吹き散らされ、そのまま男たちを吹っ飛ばした。
「シルフィード!」
それはタバサの風竜だった。ルシィ達の下へ舞い降りるシルフィード。背にはキュルケと、パジャマ姿のタバサが乗っていた。そうしているとますますちっちゃい子みたいで可愛いなあ、とルシィは思った。思ったが、いい加減疲労が限界で、タバサを愛でる余裕がなかった。
「何しに来たのよ!」
「助けに来てあげたんじゃないの。あんたたちが出かけようとしているもんだから、急いでタバサを叩き起こして後をつけたのよ」
竜の背からキュルケが飛び降りる。そして、いつものように才人を誘惑する。
キュルケに対抗心を抱くルイズはぐぬぬと歯噛みした。ルイズのヴァリエール家は、キュルケのツェルプストー家と犬猿の仲なのだ。
こんなお馬鹿な才人ではあるが、ツェルプストーの女に自分の使い魔を取られるのは我慢できない。しかし、いつものように怒鳴ろうと

する寸前で、横からルシィが入り込んだ。
「才人、僕もう疲れました。運んでください」
「え？　俺も疲れてるんだけど……」
「いいじゃないですか、さっき助けたじゃないですか。あとちょっとなんですからおぶってくださいよ」
　彼女は、才人の胸にぽす、と軽く飛び込んだ。普段ならこんなことはしないルシィだが、今回ばかりは本当に疲れていた。女の子たちに自分を運ばせるわけにはいかないし、目上であるワルドには流石にお願い出来ない。そして先ほど助け損ねたギーシュに頼むのは心苦しい。消去法的選択だった。
　面倒くさそうにしつつも、満更でもない顔の才人。そんな彼らを見て、慌てたようにルイズが叫んだ。
「ちょっと、ルシィ！」
「？　なんでルイズが怒るんです？　キュルケなら分かりますけど」
「っ、それは……」
　なんでだろう、とルイズは自問した。キュルケと違って、ルシィとは特に因縁があるわけでもない。自分の使い魔を取ろうとしているわけでもないのに……。
　ワルドが、そんなルイズの肩に手を置く。ワルドはルイズを見て、にっこりと微笑みかけた。
「ワルド……」
　そこに、男たちを尋問していたギーシュが戻ってきた。
「子爵、あいつらはただの物取りだ、と言っています」
「ふむ……、なら捨て置こう。今日はラ・ロシェールに一泊して、朝一番の便でアルビオンに向かおう」
　一行に告げ、グリフォンに跨りルイズを抱えるワルド。キュルケは才人の馬の後ろに乗って、へたったルシィに何事か苦言を漏らしている。ギーシュもまた馬に跨り、タバサは風竜の上でいつも通り本を読んでいた。
　道の向こうに、両脇を峡谷で挟まれた、ラ・ロシェールの町の灯りが怪しく輝いていた。

０５＿望郷の銀月

ラ・ロシェールで一番上等な宿に泊まることになったルシィ達。
アルビオンへの船は明後日にならないと出ないらしい。二つの月が重なる夜、『スヴェル』の翌日が、アルビオンがラ・ロシェールに最も近づく日だからだ。才人はそんなワルドの説明に首を傾げていたが、ルシィはもう彼に説明する余裕もないぐらいにくたくただった。
「さて、今日はもう寝よう。部屋を取った」
ワルドが鍵を机の上に置く。三本。七人いるし、一組だけ三人部屋だな、とルシィは思った。まあ、男女で同じ部屋にするわけにはいかないし、男組が三人部屋になるのだろうが……。
「ルシィとタバサ、キュルケが三人部屋。サイトとギーシュが相部屋。僕とルイズが同室だ」
このお兄さんめちゃくちゃ攻めに行くな、とルシィは思った。
「婚約者だからな。当然だろう？」
「それでも、嫁入り前の娘ですよ。ワルド様」
流石にどうかと思い、ルシィは窘めた。いくら婚約者とはいえ、正式な婚姻の前に同衾するのは問題だ。それが貴族となればなおさらのことだ。
ルイズも恥じらってルシィの言葉に同意し、才人もそうだそうだと無言で主張する。
「大事な話があるんだ、二人きりで話したい」
「ですが……」
「すまない、この旅の間は目を瞑ってくれ。何なら、この任務が終わった後、いや、明日にでもきみとの時間を取ろう」
やきもち焼いてるとでも思われたのかと、ルシィは渋い顔になる。
が、彼女としてはもうさっさと寝たかったし、時間を教導に割いてくれるなら悪いことではない。面倒になったのでそこで折れておくことにした。
「何よ、ルシィ。なんだかんだ言って、あんたもああいう男が好みなんじゃない」

「そんなんじゃないですよ」
キュルケに茶化され、反論するルシィ。
もしかしてルイズにも勘違いされちゃったかな、と彼女の方を振り向く。
ルシィには全然そんな気がなくても、他の女に婚約者と親しくされれば、きっと嫌な気持ちになる。
が、彼女は思ったより平然とした顔だった。ルシィは少し不思議に思いつつも、早く寝ようと部屋に向かうのだった。

何やら窓の外が騒がしかった気もしたが、疲れも相まってルシィはぐっすりと寝た。
翌朝には疲労も抜け、起き抜けに気持ちよく伸びをするルシィ。が、その瞬間腕と脚に痛みが走った。筋肉痛である。
「あいててて」
涙目になりつつ『治癒』を唱える。
ルシィは水系統に関してさほど熟達しているわけではない。氷雪さえ操るタバサとは違って、一部をつまみ食いのように修めただけ。その『治癒』は応急処置のようなものだったが、やらないよりは格段にマシだった。
「下手に水系統に寄り道しなければ、今頃もっと上達してたんでしょうか……」
使い魔のナストは小さく鳴いた。彼の”変化”を補助するために、水系統に手を出したのかと主人に聞いたのだ。
「いえいえ、ナストのせいじゃないですよ。水は前々から適性があったので、ちょくちょく勉強してましたし……それに、ナストの力と組み合わせることで、面白いことも出来るようになりましたからね」
『サモン・サーヴァント』による契約の力で、使い魔と意思疎通するルシィ。主人と使い魔には魔法の繋がりがあり、意思の疎通や、視聴覚の共有などを行うことが出来る。

ルシィは服を着替えて身だしなみを整え、『鏡』の魔法を発動させた。
じっくりと自身の幻を眺め、今日も完璧であることを確認してから、ナストをマフラーに変え部屋を出る。
廊下を歩いていくと、角の向こうで才人とワルドが何事か話していた。ルシィは思わず耳を澄ませる。
「こんな朝早くにどうしたんですか？」
「きみは伝説の使い魔『ガンダールヴ』なんだろう？　フーケの一件で、僕は君に興味を抱いたのだ」
そうなのか、とルシィは驚いた。まさか才人がそんなすごいのだったとは。
いや、確かに、才人は日本の高校生とは思えないほど強い。ギーシュに決闘でボコられていた時も、最後にはすごいスピードで逆にぶっ飛ばしていた。加えて、ギーシュより遥かに格上の熟練した土メイジ、女盗賊『土くれ』のフーケをも下している。
自分もハルケギニアに来たことで、前世を忘れず、かつ美少女で、風系統が得意で、さらに美少女で、しかも絶世の美少女であるという素晴らしい特権を手に入れたが、才人はなんと伝説の力を手に入れてしまったのだ。あれ、自分の方が良いものもらってるな、とルシィは思った。
伝説の力より、美少女の方がえらい。ルシィにとっては可愛いこそが正義であった。ありがとうございます母上、と胸のペンダントを握りしめる。
「あの『土くれ』を捕まえた腕がどのぐらいのものだか、知りたいんだ。ちょっと手合わせ願いたい」
どうやらワルドは『ガンダールヴ』の力に興味を持ったらしい。今から模擬戦をするようだ。
そりゃ面白い、とルシィはわくわくしながらついていく。彼女も根は男の子である。伝説の使い魔と風の達人、どちらが強いのかには純粋に興味があった。
ワルドが言うには、この宿はかつて砦だったらしい。中庭の練兵場

へと赴く彼らに、筋肉痛の足でついていくルシィ。
到着したのが少し遅れたルシィだが、ワルド達はまだ手合わせを始めていない。
「立ち会いには、それなりの作法がある。介添え人がいなくてはね」
よし、とルシィは頷き、手を上げようとする。
が、その時、ルシィの後ろからルイズの姿が現れた。
「ごめん、ルシィ。ちょっとどいて……ワルド、来いって言うから来てみれば、何をする気なの？」
「彼の実力を、ちょっと試したくなってね」
うわ、とルシィは上げかけた手を口にやった。このワルド、本気である。女を取り合って河原で殴り合うやつだ、漫画で見た。ルイズは彼らにやめろというが、これでは止めるに止められない。
「俺は不器用だから、手加減出来ませんよ？」
「かまわぬ。全力で来い」
才人の方も本気である。デルフリンガーを引き抜き、一足飛びに跳んで、斬りかかった。錆びた大剣と鉄拵えの杖がぶつかり、火花を上げる。
ワルドはそのまま杖で突きを放つ。メイジでありながら、接近戦だ。才人の左手にはルーンが輝き、彼を強化していたが、ワルドはそんな才人と同じぐらい素早い。その上、技巧に優れ、余裕がある。
「きみは確かに素早い。ただの平民とは思えない。さすがは伝説の使い魔だ。……しかし隙だらけだ。速いだけで動きは素人。それでは本物のメイジには勝てない。――きみでは、ルイズを守れない」
ワルドは才人の攻撃を杖で受け流し、カウンターを放つ。地面に叩きつけられる才人。彼はすぐさま飛び上がって斬りかかるが、それは難なく躱され、ついにワルドが攻撃へと移る。
「デル・イル・ソル・ラ・ウィンデ……」
呪文とともに、ルシィの目には見えないほどの速度で繰り出される突き。それを躱す才人も大したものだったが、続けて放たれた魔法の一撃は避けられなかった。
エア・ハンマーが、才人の身体を勢いよく吹っ飛ばす。衝撃に剣を

手放した才人に、ワルドが杖を突きつけた。
こうして、ルイズが見る中、手合わせはワルドの圧勝という形で幕を閉じた。
額から血を流す才人に、ハンカチを持って駆け寄ろうとするルイズ。
「駄目です、ルイズ」
ルシィはそれを止めた。女の子を取り合って負けた後に、当の女の子に慰められるなんて、男なら惨めにもほどがある。
「ルシィ、でも、」
「とりあえず、一人にしといてやろう」
ワルドにもそう言われ、引っ張られていくルイズ。
その後の才人は見るからに落ち込んでいて、昼食も喉を通っていなかった。
確かに、この世界の女の子を好きになってしまったらつらいし、ルイズのことも早く諦めた方がいいと思っていた。だが、それでも、ルシィは才人が少し可哀想だった。
「ルシィくん」
「あ、は、はい。なんでしょうか、ワルドさま」
「旅の始めに頼まれた通り、魔法の指導をしようと思ってね。昨日の行軍で疲れているならやめてもいいが……」
「いえ、大丈夫です。よろしくお願いします」
ルシィは筋肉痛の体に鞭打って立ち上がる。
訓練は先ほどの練兵場で行われた。
ワルドは隊長職だけあって、教え方が上手かった。軍人ゆえに少々厳しい教え方ではあったが、それでもワルドなりにこちらを慮っているようで、耐えられないほどの厳しさではない。
学院や独学では学べないような魔法の使い方を教わり、こんなやり方があったのかと感心するルシィ。それらも為にはなったが、やはり彼女の興味はあの『偏在』である。
「あの、ワルドさま」
「なんだね」

「風のスクウェアである『閃光』のあなたに、是非見せてもらいたい魔法があって」
「いいとも、『鏡』のルシィ。周りの迷惑にならないような魔法なら、何でも披露しよう」
　気前良く頷くワルド。ルシィは期待した面持ちで言う。
「スクウェアスペルである、『風の偏在（ユビキタス）』を見せて欲しいのです」
「――――」
　途端、ワルドの顔がこわばった。
「……ワルドさま？」
「あ、ああ、すまない。しかし、スクウェアスペルは僕でも精神力の消耗が大きい。何があるか分からない任務中では、軽々に使うことは出来ん」
「そう、ですか……」
　ルシィは落ち込んだ。これでは何のためにこの任務に参加したのかわからない。ワルドと顔を繋げただけでもよしとしておくべきだろうか。
「では、任務が終わった後に頼んでもよろしいでしょうか？　お忙しい身であることはわかっているのですが、僕はどうしてもかの『偏在』を使ってみたいのです」
「いいだろう。無事に任務から帰れれば、必ずきみに『偏在』を見せ、伝授することを約束しよう」
「本当ですか!?　まさか、伝授までしていただけるなんて」
「僕の目から見てもきみは才能がある。近い内にスクウェアにもなれるだろう」
　ワルドにそう言われ、ルシィは喜ぶ。もしそれが本当なら、ついに愛しのルシィが鏡の中から出てきてくれるのだ。ルシィは胸を踊らせた。だが、そんな風に浮かれていたためか――
「……無事に帰れれば、な……」
　――ワルドが口の中で呟いたその言葉は、ついぞ、ルシィの優れた耳にさえ、届くことはなかった。

その日の夜。
ギーシュ達は宿の酒場で酒を飲んで騒いでいたが、酒の飲めないルシィはちっとも楽しくなかった。いや、このハルケギニアでは未成年でも酒が飲めるのだが、二十歳にならないうちに酒を飲むというのは、元日本人のルシィには罪悪感を感じることだったのだ。
席を離れ、部屋に向かう。
廊下を歩いていくと、才人たちの部屋のドアが開いていた。鍵をかけずに窓でも開けたのか、風で扉が開いてしまったらしい。
ルシィはちらと部屋の中を覗く。ベランダで、才人が夜空を眺めていた。
それはなんだか普段の才人らしくない雰囲気で、ルシィは少し動揺した。
戸惑いながら見ていると、才人は静かに涙を零した。
あの、ルイズに召喚されてから一度も、悲しむところを見せず、のんきにセクハラやら覗きやらをしていた才人がだ。
ルシィには、彼が夜空を見て泣いた理由がわかった。
『スヴェル』の夜には、月が重なる。赤と青、ハルケギニアの二つの月は一つになり、青白い光を放つ。その色が、彼らに故郷を思い出させた。一つの月が銀に輝く、地球の夜。
ルシィは目を逸し、その場から離れ、物陰に隠れた。あの才人がそんな風に泣いていると、なんだかルシィまで泣きそうになったのだ。
しかし、その時、月に照らされるピンクブロンドが、ルシィの脇を通り抜けた。ルイズが才人の部屋に入っていく。
「……負けたぐらいで泣かないでよ、みっともない」
「ちがわ」
「なにが違うのよ」
「帰りたくて、泣いてたんだ。地球に。日本に」
才人がそう言葉にすると、ルシィは本格的に泣きそうになった。鼻

を鳴らし、目元を拭う。
「……悪いとは、思ってるわよ」
「どうだか」
「……この任務が終わったら、きちんと探してあげるわよ。あんたが帰れる方法を。私は貴族よ、嘘はつかないわ」
どうなんだろう、とルシィは思った。
ルシィではなかった少年がハルケギニアに転生してから、もう十五年が経った。
そう、十五年だ。
その間、ルシィが何もしなかったわけではない。今ではこの地に骨を埋める覚悟が出来たルシィも、昔は血眼になって、地球に帰る方法を探していた。
収穫がなかったわけではない。このハルケギニアには地球由来の物が度々見受けられたし、異世界人が自分や才人だけでないこともわかっていた。
しかし、結局、地球に帰る方法は見つけられなかった。
十五年、探して、それだ。
もし言えば、才人は絶望するかもしれない。諦めてしまうかもしれない。そんなのは嫌だった。だからルシィは今までずっと、自分が転生者であることを明かさなかった。
才人は自分とは違う。心が強くて、待ってる家族がいて、この世界に対するしがらみも無い。『ガンダールヴ』とかいう、特別な力さえ持っている。きっと、彼は帰れるのだろう。いつか必ず地球にたどり着くのだろう。そう、運命づけられた人物なのだろう。
しかし、それは間違いなく苦難の道だ。ルイズは果たして、それについてきてくれるのだろうか？　ルシィの母親が自分にしたように、才人の心を助けてくれるのだろうか？
ルシィは、いつかワルドと結婚するルイズに、そう出来るとは思えなかった。
「わかったわ。いいわよ。好きにすればいいわ。ワルドに守ってもらうから」

「そうしろよ」
「今、決心したわ。わたし、ワルドと結婚する」
ほら、今だってもう喧嘩を始めだした。
「あんたなんか、一生そこで月でも眺めてればいいのよ！」
そのときである。
「うわ！」
才人が叫んだ。ルイズは振り返り、ルシィは物陰から飛び出す。
月が何か大きなもので隠されていた。月光を背にするその影は、岩で出来た巨人。あまりに巨大な、岩のゴーレムである。
「フーケ！」
「感激だわ。覚えててくれたのね」
ゴーレムの肩に、女が座っている。
かつて才人たちに捕らえられたはずの、ゴーレム使いの女盗賊、『土くれ』のフーケである。
「親切な人がいてね。わたしみたいな美人はもっと世の中のために役に立たなくてはいけないと言って、出してくれたのよ」
見れば、フーケの隣には黒マントの貴族が立っていた。白い仮面をつけているので、顔は見えない。
「で、何しにきやがった」
「素敵なバカンスをありがとうって、お礼を言いに来たんじゃないの！」
ごうとゴーレムの拳が唸る。ルシィは咄嗟に杖を振るい、才人とルイズをベランダから自分の方に吹き飛ばした。直後、轟音。岩で出来た巨大な拳が、ベランダの手すりを粉々に破壊する。
「ルシィ！」
「逃げましょう！　ひとまず、みんなと合流しないと！」
三人は急いで、宿の一階へと駆け出す。
しかし、その先も修羅場だった。一階の酒場にはこちらに敵意を向ける大勢の傭兵がいて、ワルド達が魔法で応戦していた。
傭兵の中にメイジこそいないが、流石にこれは多勢に無勢。どうやらラ・ロシェール中の傭兵が束になって襲ってきているらしく、ワル

ド達も手に負えないようだった。
　ギーシュが何やら勇敢さを発揮し、突貫しようとしていたが、それは生憎無謀である。ワルドが彼の裾を掴んで制止し、低い声で言った。
「いいか諸君。このような任務は、半数が目的地にたどり着けば成功とされる」
　タバサが杖で自分と、ギーシュと、キュルケを示す。
「囮。そっちは、桟橋」
「こっちが一人多いぞ」
「戦力――メイジの数」
「使い魔は戦力外ってか」
　才人がぼやくが、タバサにとって戦力外なのは魔法を使えないルイズだったのだろう。言いかけて、やめたらしい。
「聞いてのとおりだ。裏口に回るぞ」
　才人とルイズが渋るが、タバサに「行って」と促される。
　姿勢低く駆け出す四人。即座に飛んでくる矢。防ごうとしたルシィだが、タバサが先んじて風の防御壁を張ってくれた。
　可愛いだけじゃなくて、良い子だ。ルシィはタバサに短く礼を言い、三人と裏口に向かっていった。

０６＿天空の旅路

キュルケらと別れ、港の桟橋へと向かうルシィ達。
港とは言うが、向かうのは山だ。才人がそれに疑問を呈するが、今は答えている余裕が無い。
長い階段を駆け上り、丘の上に出た。
才人が息を呑む。
そこにあったのは、巨大な樹だ。東京タワーを連想するほどの巨樹。樹から伸びる枝には、飛行船のようなものがぶら下がっている。
「これが『桟橋』？　そしてあれが『船』？」
「海に浮かぶ船と、空に浮かぶ船があるんです」
ルシィは息切れしながら、言葉少なに答える。
ワルドは樹の根元で案内看板を確認し、目的の枝に通じる階段へと走った。
木で出来た階段は大きくしなり、手すりはボロく心もとない。眼下に見える街の灯りは上っていくごとに遠くなり、すぐに恐ろしいほどの高度となる。ワルドやルイズは気にせず走っていくが、ルシィは足を滑らせないかと気が気でなかった。
「お、落ちたらどうしましょう」
「飛べばいいじゃない、風メイジなんだから」
「そうでした」
ルイズの言葉ではっとなり、勢いよく駆けていくルシィ。
しかし、途中の踊り場までたどり着いた時だった。
背後から何かが追いすがる足音。それはルシィと才人の頭上を軽々と飛び越え、ルイズの背後に立つ。
フーケの隣にいた、白い仮面の男だった。
「ルイズ！」
「きゃあ！」
男に抱え上げられるルイズ。才人は剣を振りかぶったが、ルイズに当てないようにするのは難しい。
そうしているうちに、男はルイズを抱えたまま地上へと飛び降り

る。
ワルドは閃光のように杖を引き抜き、エア・ハンマーで男を撃った。吹き飛ばされた男がルイズを離し、手すりに掴まる。落下していくルイズを助けるために、ワルドが飛んだ。
残されたのは、ルシィと才人。
二人は白仮面の男と対峙する。
「イル・ウィンデ！」
「――イル・ウィンデ」
叫ぶルシィと、小さな声で唱える男。ルシィは白仮面めがけて烈風を放ったが、それはさらなる猛風で相殺された。
「こいつっ、トライアングル以上の風使い！」
戦慄しつつ、ルシィはふと違和感を覚える。
今の詠唱……仮面越しで聞き取りづらかったが、どこかで聞いた覚えのある声ではなかったか？　思わず考え込むルシィ。
だが、戦いの場でそれは命取りだ。
ルシィに向けて杖を振る白仮面。男の頭上の空気が冷える。
「相棒！　やべぇぞ！」
デルフリンガーが叫んだ。ルシィもそれが何の予兆かを察して、引きつったような悲鳴を上げた。
『ライトニング・クラウド』！」
空気が震えた。弾ける光。
稲妻の魔法が自身を焼き殺す光景を幻視し、思わず目を瞑るルシィ。
「ルシィっ！」
だが、寸前でルシィは庇われた。
電撃が才人の体に直撃する。叫び、崩れ落ちる彼。剣を持つ左腕が煙を放ち、服が焼け焦げていた。
「っ、よくも……！」
怒りに任せて杖を振るルシィ。
男は風に殴り飛ばされ、地上へと落下していく。
「才人！　大丈夫ですか、才人！」

意識がない。慌てて胸に耳を当てる。心臓がしっかりと脈を打っていた。
失神したのは一瞬のことだったようで、才人はすぐに意識を取り戻す。ルシィは思わずほっとした。
その後すぐに、ワルド子爵が空を飛んでルイズとともに戻ってきた。
「な、なんだあいつ……しかし、いてぇ……くっ！」
「腕ですんで良かった。本来なら命を奪うほどの呪文だぞ。この剣が電撃を和らげたようだが……金属ではないのか？」
ワルドが言うのを聞きながら、ルシィは遅れてぞっとしていた。
そう、『ライトニング・クラウド』は人一人を十分に致命させうる呪文。もし才人に庇われなければ、今頃自分は……。
「助かりました、才人。あの、腕は大丈夫ですか……？」
「も、もう大丈夫だ。行こう」
才人はぎりっと歯を噛み締めながら立ち上がる。
ルシィはその様子を不安気に見つつも、三人と船に向かって急ぐ。
まだ夜なので船は出ていなかったが、ワルドが停泊中の船の船長と交渉し、脅し半分ながら商談を成立。一行は夜のうちに出発し、空飛ぶ船に乗ってアルビオンへと向かうこととなった。
船長が言うには、明日の昼過ぎには向こうに到着するらしい。
ようやく事態が一段落ついたので、ルシィは才人に話しかけようとした。
「あの、才人。怪我の具合は――」
「ねえサイト、傷は大丈夫？」
が、ルイズに先んじられた。彼女は才人の肩に手を置き、傷を心配そうに覗き込む。
問われた才人は、ぐっと顔をしかめた。やっぱり痛いのかと、彼に『治癒』をかけようとするルシィ。
「触るな」
しかし、才人はルイズの手を振り払った。彼の態度にルイズは怒ってそっぽを向く。ルシィもまた、才人があまりに頑ななので、何も言

えなくなってしまった。
ルシィはワルドを横目で見る。思い出すのは、手合わせの時、彼が才人に言った言葉。
『つまり、きみではルイズを守れない』
……きっと、才人は気にしているのだろう。自分を情けなく思っているのだろう。傷より先に、ルイズを守れなかったことが、彼は何より痛いのだろう。
でも、ルイズは助けられなかったが、自分のことは庇ってくれたではないか。
あれがなければ、ルシィはきっと死んでいた。才人はすごいやつだ。そんなに落ち込む必要はない。
ルシィは抵抗感を覚えつつも、拗ねる才人に話しかける。
「才人、さっきはありがとうございます」
「べつに」
「本当に助かりました。『治癒』をかけるので、腕を見せてください」
「いらねえ」
ルシィはむっときた。可愛い自分がこんなに感謝してるんだから、少しは浮かれればいいのに。
ルイズではないが、ルシィもまた才人の態度に怒った。そこまで好きな子の前で格好つけたいならもう勝手にしろ、とそっぽを向いた。
適当な場所に座り込んで、ふて寝するように目を閉じる。
子守唄の代わりに聞こえてくるのはワルドとルイズの話し声。
なんでも、王軍は、貴族派の反乱軍に囲まれ苦戦中だそうだ。自分たちはそんな渦中にあるウェールズ皇太子に接触し、手紙を受け取らなければならない。
きっと、明日も危険なことになるのだろう。今日よりもっとひどい修羅場が待っているのかもしれない。
「割に合わない任務ですよ、本当」
ルシィはため息をつくように言って、眠った。

意識が覚醒する。ルイズと才人が何事か話していた。
ルシィは起き上がり、目を開ける。
「……おぉ」
そして、目の前の景色に圧倒された。
そこにあったのは、天空に浮かび雲纏う遥か果てまで続く巨大な大地。
それこそが、目的地たる浮遊大陸アルビオン。地球では絶対に見られない超常的大自然。何度見ても、この光景には心を呑まれる。
才人と一緒になってそれを眺めていたルシィだが、突如、船の後方から聞こえてきた声に振り向く。こちらに向かってくる、一隻の黒い戦艦。
「船長！　あの船は旗を掲げておりません！」
「してみると、く、空賊か？」
慌てて黒船から逃げるこちらの船だが、時既に遅し。二十門もある大砲の一つで威嚇され、停船する。
ワルドはこの船を魔法で浮かしているため、戦力にならない。
ならば自分が、と立ち上がるルシィ。だが、直後ワルドのグリフォンが魔法で眠らされた。向こうにもメイジがいるらしい。
『ガンダールヴ』である才人と一緒ならあるいは……とも思ったが、剣を握る手は痛みに震えていた。やっぱり怪我が痛かったんじゃないか、とルシィは内心で唇を尖らせる。
「やめておけ。戦場で生き残りたかったら、相手と己の力量をよく天秤にかけ、わきまえることだ」
ワルドにも窘められ、武器を収める二人。
「おや、貴族の客まで乗せてるのか」
黒髪をぼさぼさに伸ばした、空賊の頭（かしら）がルシィとルイズに近づき、顎を手で持ち上げる。
「おいおい、別嬪（べっぴん）が二人もいるじゃねえか。お前ら、おれの船で皿洗いをやらねえか？」
伸ばされた手を、二人は同時にぴしゃりとはねつけた。

「下がりなさい、下郎」
「驚いた！　下郎と来たか！」
「そうですよ、消えてください、クズ羽虫の生きる価値ない害虫未満。あなたごときに何の権利があってこの僕に触れてるんです？　この身体は一片残さず至宝なんですよ空賊の船なんぞに乗せた日には即座に沈むんですよそれほどの重い価値があるんですよわかってるんですかあー汚れましたおじさんのきったない手で僕の可愛い顔が汚れました謝ってください死んでください人類の宝を汚したことを悔いながら腹切って空に散ってください」
「……。お、おう」
　ルイズの言葉を笑おうとした空賊たちが、ルシィの暴言に口元を引きつらせた。才人やルイズも、微妙に引いた顔でルシィを見る。ルシィはむかむかしていたし、せっかくならルイズの言葉に乗っかってしまおうと思ったのだ。それでも少し言い過ぎたが。
　頭は軽く頬を掻き、気を取り直すように部下に命じた。
「あー、なんだ。とにかくてめえら、こいつらも運びな。これだけ自信があるんだ、身代金もたんまり貰えるだろうぜ」
　捕らえられたルシィ達は、船倉に閉じ込められた。
　才人はデルフリンガーを取り上げられ、ルシィ達メイジは杖を奪われてしまっている。
「こんな鍵、才人の力なら簡単にぶっ壊せるんじゃないですか？」
「無理だ。なんでもいいから武器を持ってないと、力を引き出せないんだよ」
　才人はそう言いながら床に腰掛け、つっ！　と顔をしかめた。それを見て、ルイズが不安げな顔になる。
「……何よ。やっぱり怪我が痛むんじゃないの」
「なんでもねえよ」
「なんでもないってことないでしょ。見せてごらんなさいよ」
　ルイズが無理矢理袖をまくりあげる。
「きゃ！」
「う……」

そこは酷いことになっていた。電撃によってついた火傷が悪化し、ひどい水ぶくれになっている。ルシィは、なぜ昨夜才人に『治癒』をかけておかなかったのかと後悔した。
「誰か！　誰か来て！　水系統のメイジはいないの？　怪我人がいるのよ、治してちょうだい！」
「いねえよ。そんなもん」
「嘘！　いるんでしょう！」
才人の惨状に、取り乱すルイズ。才人が落ち着けとルイズを説得するが、彼女がいやよと叫ぶので、彼は怒鳴り、その剣幕についにルイズは泣き出してしまう。
その様子にルシィはますます罪悪感を覚え、つらい気持ちになった。
「……脱出しましょう」
ルシィはマフラーを撫でる。正確に言えば、マフラーに化けたナストを。
空賊にはメイジがいたが、魔法を探知する『ディテクトマジック』でも、幻獣の使う先住の魔法は探知出来ない。エコーの”変化”でナストを鍵に化けさせれば、この船倉から出られるはずだ。
「どこに脱出するつもりだね？　ここは空の上だよ」
「でも、黙って座ってるだけじゃ」
「そもそもこの船倉から出る方法さえ無い。杖がなければ、メイジは無力だ」
「それは――」
その時、ドアがばちんと開いた。痩せぎすの空賊が、こちらに問う。
「おめえらは、もしかしてアルビオンの貴族派かい？」
「……」
「だんまりじゃわかんねえよ。俺たちは、貴族派の方々のおかげで商売させてもらってるんだ。もしお前らが貴族派なら、きちんと港まで送ってやるよ」
ルシィはほっとした。ここでルイズが貴族派だと言えば、丸くおさまる。無事に港まで送ってくれるだろう。

「誰が薄汚いアルビオンの反乱軍なものですか。バカ言っちゃいけないわ。わたしは王党派への使いよ」
ルイズが迷うこと無く即答したので、ルシィは口をぽかんと開けて驚いた。才人も似たような顔で、ルイズに言う。
「お前、バカか？」
「バカですよ、これは」
「誰がバカよ！　ルシィは隣を見なさいよ、バカはサイトでしょ！怪我をこんなになるまでほっといて！」
ルイズと才人がいつものように喧嘩をし始める。それを見て、空賊が笑った。
「正直なのはいいが、お前たちただじゃすまないぞ。頭に報告してくる。その間にゆっくり考えろ」
「あんたたちに嘘ついて頭を下げるぐらいなら、死んだほうがマシよ」
ピンクブロンドの少女は一歩も引かない。大したやつだなあ、とルシィは思った。
ルイズは、本当に頑固なひとだ。そして、心の強いひとだ。つまり、才人と一緒だ。頑固で、タフな、似たもの主従だ。
「頭がお呼びだ」
空賊に呼ばれる。空賊船の船長室に四人は連れて行かれ、空賊の頭と顔を合わせる。
「王党派と言ったな？」
「ええ、言ったわ」
「何しに行くんだ？　あいつらは明日にでも消えちまうよ」
「あんたらに言うことじゃないわ」
「貴族派につく気はないかね？　メイジなら、礼金だってたんまり出る」
「死んでもイヤよ」
ルイズは、毅然と言う。
見れば、彼女は震えていた。
怖いのだ。
なのに、真っ直ぐに男を見つめていた。それが、ルシィには眩し

かった。
孤独を恐れ、望郷に泣き、絶望に屈したルシィには、ルイズがあまりにも眩しすぎた。それは見覚えのある輝きだった。ギーシュと決闘した時の才人と、同じものが彼女に見えた。
「トリステインの貴族は、気ばかり強くって、どうしようもないな。まあ、どこぞの国の恥知らずどもより、何百倍もマシだがね」
空賊の頭が笑い、立ち上がる。直後、背後の空賊たちがニヤニヤ笑いをやめ、真面目な顔で直立した。
「失礼した。貴族に名乗らせるなら、まずはこちらから名乗らなくてはな。――アルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ」
空賊の頭はカツラを取り、眼帯と、付け髭を剥ぐ。
現れたのは、凛々しい金髪の若者だった。その人こそまさに、一行が接触しなければならない人物、ウェールズ皇太子である。
驚きに呆然とするルシィ達。ワルドだけは、興味深そうにウェールズを見つめていた。
「アンリエッタ姫殿下より、密書を言付かって参りました」
ワルドが優雅に頭を下げて言う。ルイズが胸ポケットから密書を取り出す。
「その、失礼ですが、本当に皇太子さま?」
「まあ、無理もない。なんなら証拠をお見せしよう」
ウェールズが、指に嵌めていた風のルビーを、ルイズの水のルビーに近づける。二つの宝石は共鳴し、虹の光を振りまいた。それは確かに、彼がアルビオンの王家であることを示すものだった。ルシィは土下座した。
「おや、どうしたね。自信に溢れたお嬢さん?」
「そ、そそそ、その、皇太子さまには、まことに、まことに申し訳……」
「はっはっは! 良いとも、敵の頭を前にあれだけ言えるのなら大したものだ!」
ウェールズは笑って流し、密書を読み始める。
「そうか……了解した。多少面倒だが、手紙のあるニューカッスルまで足労願いたい」

07―1　決戦の前夜（前）

ウェールズ達の巧みな操船により、一行はニューカッスルの秘密の港へと到着した。

ニューカッスルの城にある手紙は、確かにルイズへと手渡された。それはウェールズに宛てたアンリエッタの許されない恋文であり、アルビオンの貴族派『レコン・キスタ』には決して渡ってはならないものだったのだ。

あとは、明日の朝に先ほどの空賊船――『イーグル』号で王党派の非戦闘員とともにトリステインにたどり着けば、この任務も完了となる。だが、手紙を受け取ったルシィ達の顔は晴れなかった。

その日の夜は、ささやかな饗宴が開かれた。

それは、アルビオン王党派にとっては最後の晩餐である。

……そう、彼ら王軍は名誉を守るために、三百の兵で五万の敵に挑み、死ぬつもりなのだ。それは王も、ウェールズ皇太子も例外ではない。むしろ、彼らは真っ先に戦い、死なねばならない立場なのだ。

城で行われるパーティの中。

死を前に明るく振る舞う人々を、才人は悲しげに見ていた。ルイズは才人よりさらに感じ入って、席を離れてしまった。ワルドは才人にルイズを慰めるよう頼まれ、また席を離れた。ルシィと才人。二人だけがその場に残る。

賑わう王党派の貴族たち。しかし、才人は見るからに気が滅入っていた。ルシィもなんだか感傷的な気分になって、ぽつりと呟く。

「あんな風に死ねるなら、幸せなんでしょうね」

「……俺には、わかんねえよ。名誉とか誇りのために死ぬなんて、馬鹿げてる」

「立派に頑張って死んだなら、悔いも残らないでしょう。……羨ましいですよ、僕は」

「貴族ってのは、みんなそうなのか」

「貴族だからじゃありません。僕が僕だから、言うんです」

ルシィは思う。自分が前世で、彼らのように死んだなら、生まれ変

わったことをもっとすぐに受け入れられただろうと。
彼女はずっと、諦めてきた。前世の夢を、絆を、愛を、努力を、成果を、自分を。少しづつ少しづつ諦め、削っていった。残ったものは、未練の残骸が一欠片。だが、彼らが死んで生まれ変わったなら、その魂には誇りが残るのだろう。今世で手に入れたそれが、来世をずっと輝かせていくのだろう。
転生者であるルシィにとって、それは、とても幸せなことのように思えた。
「なんで、死ぬのが怖くないんだよ」
「怖いですよ。――わかっていても、怖い。わかっているからこそ、怖い」
才人が一瞬不思議そうな顔になる。だが、ルシィはそのまま続けた。
「あの人たちだって怖いはずです。それでも、守らなきゃいけないもののために、恐怖を忘れてる」
「そこのお嬢さんの言う通りだ。我々は誇りを守り、勇気を示さねばならない。それが我らの義務だからだ」
やってきたのはウェールズだった。ルシィは自分の言葉をこの王子に聞かれたのが恥ずかしくなり、顔を赤くした。
「……その、今のは違うんです。ウェールズ皇太子。僕はきっと、あなた達みたいには出来ない。心が弱くて、怖がりなんです。誇りなんてない。この世に大事なものなんて、この身一つしかない。僕は誰より、自分が一番可愛いから」
「はは、そうだね。きみは確かに可愛らしい……おっと、今のはなかったことにしてくれ。アンリエッタに告げられては困るからね」
愛おしげに言うウェールズ。二人のやり取りを見て、ウェールズに向けて才人が問う。
ルシィは二人の会話から意識を逸らし、聞くのをやめた。きっと、弱い自分では受け取れないような、大事な思いを託すのだろうと、そう思ったからだ。
才人が俯き、ウェールズが座の中心に戻っていく。ウェールズはそ

の途中で、広間を見るルシィの肩に手を置いた。
「きみはきっともう持っている。大事なものを。守るべき誇りを」
「……買いかぶりですよ。僕にそんなもの、あるはずもない」
「必ずしも我が身にあるとは限らないさ。それはきっと、湖面と同じだ」
そう言って、ウェールズは去っていった。
ルシィはまだ彼らとともにいるつもりだったが、才人はもうここにいるつもりはないらしい。
給仕に部屋の場所を尋ねる彼を、戻ってきたワルドが呼び止めた。
「明日、僕とルイズは、ここで結婚式を挙げる」
ルシィは驚いた。それは才人も同様だった。
「こ、こんな時に？　こんなところで？」
「ああ。決戦の前に、僕たちは式を挙げる」
しかし、ワルドの決意は堅い。なんとしても、あのウェールズ皇太子に媒酌を務めてもらいたいらしい。
「きみらも出席するかね？」
ルシィは才人と一緒になって首を振る。ルイズとワルドはグリフォンで帰り、ルシィ達は朝早くに『イーグル』号で帰ることとなった。
才人は酷く傷ついた顔で、一人城のホールから出ていく。まだ残っているつもりだったルシィだが、どうにも彼が気になって、少し早くその場を離れた。
ルシィは『ライト』を唱えながら歩いていく。暗く静かな廊下。
窓から差し込む月光の下で、才人とルイズは一緒にいた。
二人は何か言い争っていたが、普段の喧嘩とは、雰囲気が違った。
ルイズは泣きそうな顔で、才人は真剣な、そして、寂しそうな顔で、彼女に語りかけている。
「ここでお別れだ、ルイズ。元の世界に帰る方法は、一人で探す」
才人は、ルイズのことを諦めていた。ルイズから離れることを決めていた。
それはルシィが彼に望んでいたことのはずだったが、それなのにど

うしてか、胸が痛い。つらくて、悲しくて、たまらなかった。
「ばか！」
ルイズは才人の頬を張り、泣きながら廊下を駆けていく。
すれ違う自分の姿も目に入らぬルイズを見て、ルシィは悟った。
あの空賊船で、恐怖に震えながらも心を貫いたルイズ。何度打ち倒されても譲れぬもののために立ち上がった才人。
どうして才人がルイズを好くのか、本当の意味で分かった気がした。でも、彼らの道は交わらない。きっと、もう二度と。
「さよならルイズ。優しくて可愛い、俺のご主人さま」
もう、ルシィは放っておけなかった。
今の才人は、この旅の中で、最も傷ついていると思った。
「才人」
声をかけ、部屋に歩いていく才人を引き留める。才人ははっとした顔で振り返った。
「……なんだ、ルシィか」
「なんだとはなんですか。美少女に話しかけられたんだから喜んでくださいよ」
「うるせえ」
あえて、能天気な調子で言うルシィ。才人は顔を逸らし、窓の外の月に目をやる。
「才人は、故郷に帰るんですか？」
「聞いてたのか？」
「ええ、耳が良いもので。途中から来たので、全部聞いたわけじゃありませんが」
そっか、とどうでも良さそうに才人は言った。
「よかったじゃないですか、ようやく家に戻れますね」
「そうだな」
「もう慣れないトリステインで生活する必要もありません。久しぶりにお父さんやお母さんと会えるし、友達とだって遊べる」
「ああ、家族が待ってる。照り焼きバーガーだって、食べたいし」
「ですよね。嬉しいですよね、家に帰れるのは」

「……」
才人は言葉を返さない。いや、返せない。
ルシィは、月を見る才人の横顔を見て、言った。
「だから、才人」
「なん、だよ」
「泣かないでくださいよ」
才人の目からは、いつの間にか涙がこぼれていた。
それは才人が泣くまいと思えども溢れ出し、どんなに拭っても止まらなかった。
「泣いてねえよ」
「そんな顔で格好つけてもしょうがないでしょう」
「仕方、無いだろ。俺じゃ、ルイズを守れない」
才人の頭の中で、旅の記憶が蘇る。
矢を射掛けられた時も、ワルドと決闘した時も、白仮面の男に襲われた時も、自分は何も出来なかった。危機を救ったのは大抵がワルドで、自分はただ見ているだけだった。
「……いいえ。才人は、すごいやつですよ」
「どこがだよ。伝説の使い魔だ、『ガンダールヴ』だ、なんて言われても、結局俺は普通の人間だ。これなら、ルシィの方がよっぽどマシだ」
「そんなことありません。才人の方がすごいんです。強いんです。頑張ってるんです」
「すごくも、強くも、頑張ってもねえよ」
「でも」
粘り強く反論しようとするルシィを、才人は制止する。
「信じてもらえないと思うけど、俺、別の世界の人間なんだ」
「……」
「帰る方法なんて分からない。こっちの世界に知り合いひとりだっていないんだ。前にこの世界に来た人も、そのまま死んだって聞いた。多分、俺も無理だと思う」
「そんなこと、ありません。才人はきっと、帰れます」
「帰れねえよ。簡単にそんな、分かったような口……」

「それでも、帰らなきゃいけないんです！」
言葉を遮り、堪えきれなくなったようにルシィが叫ぶ。いきなりの剣幕に、才人は思わず息を呑んだ。
才人の顔を両手でつかみ、ルシィは声を張り上げる。
「才人には帰る家があるんでしょう?!　待ってる人たちがいて、受け入れてくれる場所があって！　簡単に分かったような口利いてるのは、才人の方じゃないですか！　この世界に来て、まだ一ヶ月も経ってないくせに！」
「る、ルシィ」
「才人は僕と全然違うじゃないですか！　君は特別です、帰れるんです、絶対に！　ギーシュと戦った時からずっとそうだった！　折れなかった！　屈さなかった！　譲れないもののために、君は自分を貫いていた！　そうでしょう、平賀才人!?」
「ルシィ……」
抑え続けていた感情が発露していた。それは旅の間に溜め込まれていた思いであり、ハルケギニアに生を受けてから潜め続けていた思いだった。
「好きな子が結婚するぐらいで泣かないで下さいよ！　あの日からずっと希望だったんです！　僕にとって、帰れなかった人たちにとって！　覚えているでしょう、才人は『我らの剣』なんだ！　だから、だから……」
なぜか、ルシィの言葉が止まる。
まだ言いたいことはいくらでもあったのに、喉が何かで詰まっていた。
「わかった」
才人は答えた。泣き止んだ。
そのまま、ルシィの顔に手を伸ばして、言った。
「もう泣かねえ」
「才人」
「だから、お前も泣くなよ、ルシィ」
「え……」

才人の手が濡れていた。ルシィの零した涙だった。
「あ、な、なんで……もう、割り切ったのに、僕は、ちゃんと、見つけたのに……」
「俺、頑張るよ。帰る方法も、ちゃんと探す。ありがとな」
「っ……！」
ルシィは、涙を見られたくなくて、顔を伏せた。しかし、額に才人の胸が当たる。顔に触れるポリエステルの感触が妙に懐かしくて、思わず、すがりつくように、ルシィはもう一度泣いたのだった。

０７―２　決戦の前夜（後）

泣き終わったルシィは、子供のようにぐしぐしと目元を拭う。
「って、何抱きついてるんですかバカ！」
そして、いつの間にか才人に抱きしめられていたことに気づき、ルシィは彼を両手で突き飛ばした。
「何すんだよ！」
「何すんだよじゃないです！　今ので惚れたと思ったら大間違いですよ！　むしろ最初から大好きなのに恋愛感情は一切無い時点で察してください！」
「そんな理不尽な」
才人はズボンを何度か払って立ち上がる。
「えっと、それで、ルシィは地球から来たってことでいいのか？」
「そうですよ。というか今の流れでそうじゃなかったらびっくりですよ」
「なんで、言ってくれなかったんだよ」
「……それは」
ルシィは言いよどみ、才人を見る。
先ほどは勢いでつい自分が同郷であることを漏らしてしまったが、果たしてこれを言っていいものか。ルシィは悩むが、才人は「大丈夫だ」と力強く頷いた。
「……見つからなかったんですよ、ずっと」
「それは、帰る方法が？」
「そうです」
「ずっとって、どれぐらい」
「十五年」
才人はあんぐりと口を開けた。
「嘘だろ。ルシィっていつからハルケギニアにいるんだよ」
「生まれた時からです。地球にいた時は普通の高校生だったんですけど、地球でトラックに撥ねられて、死んで、気がついたらルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユちゃんゼロ歳に生まれ変わってました」

「なんか、すごいな……そっか、生まれ変わった時からずっと……」
「……嫌に、なりました？」
　ルシィは不安げに問う。才人は首を横に振った。
「いいや。びっくりしたけど、でも、探すよ。探すっていったもん、俺」
「……ふふっ。やっぱり強いですね、才人は。流石は伝説の力の持ち主です」
「まあ、『ガンダールヴ』とか言って、ワルドにはずたぼろに負けたけど。でも、この力は多分、俺を元の世界に導くんだと思う。なんとなく、そんな予感がする」
　才人が背中のデルフリンガーを握り、左手のルーンを光らせる。わずかに鞘から刀身を出したデルフリンガーは、剣なのにいびきを立てて眠っていた。
「うん……きっと、才人なら出来ますよ、絶対に」
「惚れた？」
「惚れませんよバカ。っていうか前世男ですよ、僕」
「えっまじで」
　才人は愕然とする。ラ・ロシェールの港町で、ルシィを宿まで運んだ時とか結構ドキドキしたのに。
「でも。友達ですよ、才人。惚れませんけど、好きだから、友達です」
「……そうだな、友達だ」
　ルシィは歯を見せて笑った。才人もまた、同じように笑った。
「そうだ。明日はきっとごたごたするでしょうし、今の内にお土産あげます」
「お土産？　アルビオンの？」
「お土産というか、背中を押すというか……。実際にやった方が早いですね。僕の部屋までついてきてください」
　ルシィはそう言って歩き始める。そして、思い出したようにくるっと振り返って、言った。
「ちょっと……緊張しますね。今まで、誰にも見せたことなんてなかったですから……」
　照れたようにはにかむルシィ。そして、また振り返って部屋へと歩

いていく。緊張したと言いつつ、どこか楽しげな足取りだった。
才人はドキッとした。え、つまりこれって、そういうことなの？
ルシィの部屋に、男女二人で……いや、ルシィは男なんだっけ。でも、身体は女の子だ。女の子が緊張しながら見せてくれるもの。今まで誰にも見せなかったもの。
才人はにわかに期待し始める。ルイズの裸は着替えさせる時に見たが、ルシィはルイズとは違う。ルイズより背が高いし、ルイズ同様スラッとはしてるけどゼロじゃない……いやいや、待て待て。そう、待つのだ平賀才人。ルシィの中身は男の子なんだってば。それに、自分はルイズが……いや、ルイズはワルドと結婚するんだけども、だけど、しかし……。
そんな風に悶々とする才人だが、ついに部屋についてしまう。
少し薄暗い部屋の中、ルシィはぽすんとベッドに座る。彼女はおろおろとする才人を不思議そうに見つつ、なんてことないような表情でこう言った。
「今から才人に、魔法をかけます」
「えっ」
呆気にとられる才人の前で、ルシィは懐から瓶を取り出す。それには目一杯真っ赤な液体が詰まっていて、才人はざざっ！　と後ずさった。
「そんなに怖がらないでください。ただの色付き水ですよ。絵の具みたいなもんです」
ルシィはこん、こん、と瓶を取り出し、床に並べていく。赤、青、黄、緑。四色の色付き水が詰まった瓶が、正方形の形で置かれた。
「えっと、何するつもり？」
「だからお土産です。戻っていいですよ、ナスト」
ルシィは首に巻いたマフラーを撫でる。それはしゅるりと形を変えて、青い目のイタチのような小動物に変化した。ナストは並べられた瓶の真ん中へと移動する。
「幻獣・エコー。僕の使い魔で、サイズの違いすぎないものなら大体なんにでも変身できます」

「すげえ。これがお土産？」
「違いますよ。ナストは僕のです。あ、これは友達同士の秘密ですよ。ナスト取られちゃったら困りますから」
「じゃあ一体何するつもりなんだよ」
彼女の意図がつかめなくて、才人はぶすっとした顔で聞いた。
ルシィは才人の疑問には答えず、杖を用意し、瓶の蓋を開けながら言う。
「僕の二つ名は知ってますか？」
「『鏡』、だっけ？」
「そうです。僕は風メイジですけど、水もちょっと齧ってます。それで得意になったのが、光の反射、屈折、散乱。だから鏡。『鏡』のルシィ」
自分の幻を作るというのも、その一環。ルシィは、光と幻を操ることにかけてトップクラスのメイジなのだ。
「フル・ソル・ウィンデ。……よく見ててくださいね、才人」
『レビテーション』。浮遊の魔法が、ナストと、四色の液体を宙に浮かす。
球状になって浮かぶ液体に囲まれたナストは、高く澄んだ声で鳴いた。先住の魔法が発動し、ナストの姿が、無色透明の、しかしまばゆい光を放つ水へと姿を変える。
ルシィは更にスペルを重ねた。風の二乗に水を加算。『フェイス・チェンジ』のアレンジ魔法。その呪文の名を『シェイプ・チェンジ』。
五色の液体が混ざり合い、輝く虹色の煌めきへと姿を変える。
直後。
部屋の中が、宇宙に変わった。
「うわっ！」
「落ち着いてください！　プラネタリウムみたいなもんです！」
確かに、それは部屋の中が真っ暗になっただけだった。床の感触はそのままだし、手を伸ばせば壁だってちゃんとある。遠くに見える星々はそこに貼り付いた光の粒だ。魔法というのはこれほどのことが出来るのかと、才人は思わず息を呑む。

星々は廻転し、宇宙の姿は移り変わる。それは奇跡で織られた幻想だった。始祖のもたらした系統魔法と、精霊が揺り動かす先住の魔法。二つが組み合わさり、世界の色はルシィとナスト、彼女らの思うままになる。

気づけば、才人の前に浮かぶ、鮮やかな青色の球体があった。才人は好奇心を発揮し、輝く物を見つめる。それは――

「地球……？」

ごっ！　と才人は地球に接近する。いや違う、ルシィの作った仮想の地球が拡大化しているのだ。部屋の大きさを越えて地球が広がることこそなかったものの、視界いっぱいに広がり、表面の様相を変えていく。

まるで落ちていくかのような錯覚。航空写真をどんどんと引き伸ばしていくような変化。近づいてくる日本列島。

気づけば、才人は日本の町並みにいた。いや、部屋の中が、日本の幻に包まれていた。

そこは有名な観光地でも何でも無い。才人の見知らぬ住宅地。しかし確かに、ハルケギニアにはあるはずのない景色だった。

もう泣かないと決めたはずなのに、才人の目がじわりと滲む。少し古く、見知らぬ場所。しかしそここそが、才人たちの生きた元の世界そのものだった。

「僕はね、才人。前世を決して忘れないんです。過ごした町の姿も、あの日歩いていた人々も。そこに舞い落ちていた木の葉の数さえ。だからこれは、間違いなく僕らの世界です。ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユではなかった少年が見た、まったき前世の姿です」

景色が移り変わる。

ルシィが見せたのは、何も派手な光景ではなかった。本当に些細な、日常の光景だった。

家族との朝食。友達との登下校。昼下がりの授業風景。夜に父親と見ていたテレビ番組。また明日と、そう言って眠りにつく母親の姿。

そこに才人の知る物は何もなかったけれど、それでも、才人は確か

に家族を想った。待っている父親を母親を、そして友人を。
思わず、才人は幻に手を伸ばす。瞬間、幻想はシャボン玉のようにぱちりと弾け、消えた。だけど最後に、見覚えのない少年の姿を見た気がした。才人の記憶にはない人物だったけれど、才人は彼を知っている気がした。
「終わりです」
ルシィが呟く。はぁはぁ、と、銀髪の少女は、荒い息を漏らしていた。
「精神力はさほど使いませんが、頭が、疲れますね。どうでしたか？」
「……ありがとう、すごかった」
「どういたしまして、才人」
ルシィは優しく微笑む。
月光に照らされるその髪は、どこか才人の知る、地球の月の色に似ている気がした。

「えっ、出会い系ってなんですか。聞いたことないんですけど」
「インターネットで彼女探すんだよ。今はみんなやってる」
「いんたー、ねっと……？」
「知らねえの？」
「き、聞いたことはありますもん。なんか、大学でやってるやつですよね」
「うわあ、そっか、ルシィが地球にいたのって十五年前だもんなあ」
「な、なんですか！　悪かったですねロートルで！　どうせ魂年齢そろそろ三十路の中年ですよ、僕は！」
才人とルシィは、その後も部屋で話していた。同郷の出身として、募る話はいくらでもあった。
ルシィは部屋に備え付けられた羽ペンで書き物をしながら、才人と談笑する。
「才人は、帰ったら何がやりたいですか？」

「えっと、そうだな……インターネットサーフィンして、照り焼きバーガー食べて……。あ、そうだ、ハンバーグも食べたい。召喚された日の夕飯が、ハンバーグだったんだ」
「食べ物ばっかじゃないですか。ハンバーグぐらいならこっちでだって作れますよ。一度チラ見したレシピ本の内容も全部覚えてますし」
「うお、すげえ」
「この世界の母上も作ってくれたんです」
二人は笑う。
明日には戦争があって、この城は戦地になる。あのウェールズ達も死ぬのだろう。でも、今だけは楽しかった。懐かしく楽しくて、とても穏やかだった。
「良かったら今度、学院に戻った時に作ってあげましょうか？」
「いや、でも……俺、荷物まとめ終わったら、旅に出るから。元の世界に帰る方法を探しに」
「あ、そっか。そうでしたね」
ルシィは少し、声のトーンを落とす。才人はそれを見て、ルシィに問いかけた。
「ルシィも一緒に来る？」
「僕は……いけませんよ。トリステインに帰ったら、嫁に行かなきゃならないんです。心は男なのに」
「嫌なら、行かなきゃいいじゃん」
「無理ですよ。僕が失踪したら、ジョンキーユ伯爵はきっと血眼になって探します。僕はトライアングルな上に、美少女ですから。結婚したいという男性が後をたちません」
「そ、そう」
「ついて行ったら、才人の旅の迷惑になる。だから、行けません」
才人は黙り込む。ルシィはそれを見て、慌てて言った。
「で、でも、そう簡単に親の言いなりになる気はありませんよ！　最低でも、学院を卒業するまでは粘ってみせますから！」
「おう。一緒に頑張ろうぜ」
「ええ！」

才人と一緒に励まし合う。少し無言になって、ルシィがかりかりとペンを走らせる中、「結婚か」と才人が呟く。
「なあ、ルシィ」
「なんですか？」
「ルイズのこと、よろしく頼むよ」
ルシィはそう言われ、思わずきょとんとした顔になった。
「それは……僕じゃなくて、ワルド子爵に頼むべきだと思いますけど」
「だって、俺は、ワルドよりお前の方を信頼してるもん」
「……やっぱり、寂しいんですか？」
「わかんねえ」
才人は言った。
「でも、心配なんだよ。あいつ、あんなんだけど……根っこはいいやつだし」
「そうですね。わかります。ルイズは大したやつです」
「だけど、我がままだし、乱暴だし、意地っ張りだし。結婚しても色々大変だと思うから、助けてあげてくれ」
「……分かりましたよ。友達の頼みですからね」
ルシィは快く応えて、笑う。思えば、この二度目の人生で、ここまで仲のいい友達が出来たのは、初めての気がした。
ルシィは書き物を終え、ペンを止めた。
書き記した物をルシィは眺める。
それは、ルシィがこの世界に来てから手に入れた、手がかりとなるかもしれない情報。十五年かけて手に入れた断片、その全てをまとめたものだった。
「思ったより、多いんだな」
「ま、中には使えなさそうな情報も混じってますからね。タルブ村にヨシェナヴェって名前の寄せ鍋料理があるとか」
タルブ村という地名に才人は聞き覚えがあったが、今すぐにはそれがなんだったか思い浮かばなかった。
「あ、そういえば、フーケが盗んだ『破壊の杖』ってあっただろ。あれの正体、ロケットランチャーだった」

「ええ、本当ですか？　うわ、そんな近くに手がかりになりそうな情報があったなんて……戻ったら、学院のこともっと調べてみますかね」
　情報を記した紙を、才人は受け取る。名残惜しそうに立ち上がり、彼は部屋を出る。
「また明日な、ルシィ」
「いえ、明日は結婚式に参加することにします。ルイズのこと、頼まれちゃいましたから。トリステインに戻ったら、また会いましょう、才人」
　才人は「そっか」と、言って、今度こそ部屋を出た。一人のこされたルシィ。
『ワルドよりお前の方を信頼してる』、ですか……」
　ルシィは就寝の準備をしながら、才人の言葉を思い返す。
　あの時。白仮面の男に襲われた時。呪文を呟いていた声音、あれは……。
「まさか、ですね」
　おやすみなさい、とナストに呟く。
　明日の式は早い。早めにルイズを祝福する準備をしておこうと思い、ルシィは目を閉じた。

　翌日。ルシィは朝早くから、ワルドに頼まれ、式場の設営準備をしていた。
　女子一人にはなかなかの大仕事だが、魔法を使えばさして難しいことでもない。
『レビテーション』や『ライトネス』……軽量化の魔法を使い、物を動かしていくルシィ。戦のために用意されていた剣などをどかし、城の中庭を飾り付け、結婚式に相応しい内装へと変えていく。
「手伝おうかね」
「あ、いえ！　これで最後ですから！」

いそいそと励む彼女に、背後からワルドが話しかけた。
ルシィはささっと準備を終え、廊下に一人佇むワルドの下に向かう。
「すまない。一人で準備をさせてしまった」
「いえいえ。他の人たちは出港や戦の準備で忙しいですし。当日になって急に参加させて欲しいって頼んだんですから、これぐらい当然ですよ」
ルシィはにこやかに微笑み返し、近くにあった棚に杖を置く。
「杖は持たなくていいのか？」
「式場に武器を持ち込むわけにはいかないでしょう？」
「僕もルイズも気にしないが……まあ、きみがそうしたいというなら構わん」
二人は中庭へと歩いていく。歩きながら、背後でワルドが何かを呟いていたが、ルシィは気にしないことにした。
ニューカッスルの庭師は、直前までここの手入れをしていたのだろう。今から戦争が始まるとは思えないくらい、優雅で、美しい、穏やかな場所だった。
「式は中庭ですることにしたんですね。礼拝堂もありますし、そこでするのかと思ってました」
わずかに離れた場所にある礼拝堂の方角を見る。
中庭にも始祖ブリミルの像は用意したが、あそこにあったものの方がずっと立派だ。
「ああ。本当ならそのつもりだったのだが、ここの庭園も見事なものだ」
「確かに、綺麗な場所です」
「決戦が始まれば、ここも踏み荒らされる。礼拝堂はどこのものでも似たような造りだが、この景色は今だけのものだ」
「この景色を見るのは、僕たちが最後ってことですね」
「そうだな。――まさしく、その通りだ」
直後、ワルドは呪文を唱えた。
凄まじい速度とともに杖が振られ、冷えた空気が、ルシィの肌を刺

す。
彼女が振り返った時には、もう、その魔法は放たれていた。
稲妻が伸びた。『ライトニング・クラウド』。それは無防備なルシィの背中に飛んで、雷鳴のような音を響かせる。
しかして、その音は途中で消えた。ワルドが直前に唱えた『サイレント』により、周囲に音が漏れることはなかった。
「さらばだ、ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユ。殺すには惜しい才能だった」
ワルドは振り返る。
彼は華やかに飾りつけられた中庭に何の感慨も感じぬまま、使われるはずもない式場を後にした。

08―1　異界の双風（前）

――そして、倒れ伏したはずのルシィから、逆流するように電撃が放たれた。
ワルドは杖を振る。
彼の背後に展開された『エア・シールド』が、稲妻を弾いた。
空気を密にすれば、電気は抵抗の少ない場所へと逃げる。人一人を死に至らしめるはずの魔法は四散し、服の端を焦がすだけに終わった。
「……くそっ！」
電撃を浴びたはずのルシィは立ち上がり、ワルドに対して杖を向けていた。
無防備に電撃を受けたはずの体には、わずかな火傷の痕もない。彼女もワルド同様、ひそかに発動した『エア・シールド』で電撃を防いだのだ。
……しかし、もしこれが初見だったならば、対策しても防げぬ速度だった。ルシィは内心で冷や汗をかく。
ワルドは羽帽子の下からルシィを見る。鷹のように鋭い眼光で、銀髪の少女を見定めていた。
「やはり、先ほど置いていった杖は偽物か。あのように精巧な贋作、いつの間に用意した？」
不意打ちに失敗したルシィは、悔しげに歯を食いしばる。今の一撃でワルドを倒せなかったのならば、彼女の勝算は限りなく低くなる。
「狙いは悪くないが、やり方が露骨過ぎたな、『鏡』のルシィ。そのような手であれば飽きるほど見た」
ワルドはルシィに向き直る。彼の顔にはもう、人格者じみた柔和な笑みはない。
ルシィは普段は決して見せないような怒りの形相で、眼前の裏切り者を睨んだ。
「あなたが、あの白仮面の正体だったんですね、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド！　トリステインの禄を食みながら、アルビオ

ンの貴族派についた反逆者！」
「そうとも。いかにも僕は、アルビオンの貴族派『レコン・キスタ』の一員だ」
ワルドは冷たい、感情の無い声で言う。
「何故ですか！　あなたはルイズを愛していたはずでしょう!?　こんなことをすれば……」
「愛するとか愛さぬとか、そんな感情は忘れたよ」
「貴様っ！」
激昂するルシィだが、頭の中は冷静だった。
ルシィは、ワルドがこちらへ気を取られている隙に、背後に置いてきた杖へと視線を送る。
杖は即座に変化し、青い目の幻獣、エコーへと変わった。ルシィの使い魔、ナストである。
ルシィは「ルイズに伝えなさい」と目で合図する。ナストはこくりと頷き、ワルドに気づかれぬよう廊下を静かに走り去っていった。
ワルドの狙いは恐らく、ルイズが受け取った手紙だろう。だが、今から逃げれば、『イーグル』号の乗船にはまだ間に合う。
ワルドが『イーグル』号に追いつかないよう、グリフォンは念の為に鍵のかかった檻に移しておいた。あとは、『イーグル』号が出港する時間を稼ぐだけでいい。
「悪いが、きみはここで消えてもらう。周囲には『サイレント』を張った。例え叫ぼうが、助けは来ない」
少女に向けられる本気の殺意。ルシィはぞくりと背筋を震わせたが、即座に眼前の敵を睨み返す。
「……逃げぬのか？」
「あなたは逃さないでしょうし、僕も逃げません」
「言っておくが、きみでは勝てない。きみごときには『偏在（ユビキタス）』を使う必要さえない」
「余裕ですね、『閃光』。そういう者が、足元をすくわれ死ぬのです」
恐怖はある。しかし、彼女の体が鈍ることはない。
ルシィは今、この一時だけ、恐怖を忘れていた。至上とする自分（ルシィ）よ

りも大切な、譲れないもののために。
そう、ルシィにも守るべき誇りはあった。否、出来たのだ。
それはあの使い魔の少年であり、彼の愛した少女だった。
彼らの持つ眩しさが、輝きこそが、ルシィの守るべき誇りだった。
『必ずしも我が身にあるとは限らない。それはきっと、湖面と同じだ』……ええ、確かにそうでしたよ、ウェールズ皇太子」
二人の輝きを映し取り、『鏡』の少女は杖を構える。
魂の奥底で、風が轟々と唸っていた。

ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユは、転生者である。
彼女は一九九〇年代前半の地球で、男子高校生として生きた前世を持つ。
そして、そんな彼女が生まれ変わって得た特性こそが、『前世を決して忘却しない』という、呪いのような祝福だった。
「このっ！」
「風メイジだと思っていたが、水どころか、火まで扱うのか」
ゆえに、彼女は前世で得た情報の全てを正確に把握している。何気なしにペラペラとめくった化学の教科書の一節でさえ。
電気分解によって作られた爆鳴気が破裂する。
気体分子を操って作られた毒ガスがワルドの周囲を包む。
日光を屈折させて作られた熱線がワルドに向けて照射される。
電磁力へ干渉して作られた磁場が鉄拵えの杖を奪い取ろうとする。
それらはワルドにとっても未知の攻撃だった。対応に手間を割かれ、本来なら格下であるはずの少女に時間を稼がれる。
「なるほど、今の魔法学院は随分と変わったことを教えているらしい。だが、その魔法は実戦を想定して作られたものではないだろう？」
「くっ……」
しかし、裏切ろうとワルドは歴戦の兵である。魔法衛士隊の隊長として、様々な魔法に対する訓練を行ってきた。

『炎球』から身を守る方法。
『眠りの雲』を吹き飛ばす方法。
光の速度で迫る電撃を回避する方法。
杖を奪い取る『念力』に対処する方法。
確かに、ハルケギニアの技術は地球に比べ遅れている。だが、全てがそうではない。一部のメイジは経験則からくる、優れた科学知識を持つ。
いくらルシィが地球の科学知識を持つとは言え、所詮は一般的な高校生レベル。しかも、今世のルシィは戦いなどほとんど想定したことのない令嬢だったのだ。お遊びで作ったような付け焼き刃の攻撃魔法で、熟練のメイジとの戦闘に勝ることは出来ない。
「ぐあっ！」
小細工を、経験と、力で吹き飛ばされる。
少女は風に殴られ、勢いよく中庭を転がった。
「今ならば楽に死なせてやるが」
「黙りなさい、薄汚い裏切り者が……！」
どれだけ痛めつけられようと、杖だけは決して手放さない。
震える足で立ち上がる。
顔についた血を強く拭い、眼光鋭くルシィは言った。
「よくも、美少女の顔に傷をつけてくれましたね。僕を舐めてると後悔しますよ、ワルド子爵」
「なぜドラゴンが小鳥に怯える必要がある？」
ルシィは、やり方を変える。
付け焼き刃ではワルドに勝てない。これは、自身の全てと、命をかけて挑まねばならない相手だ。
中庭の隅に寄せておいた剣を手に取った。
それは、鉄塊のような剣だった。大の男でも持ち上げるのに苦労するほどの大剣である。しかしルシィはふらつきながら、どうにかそれを持ち上げる。
「まさか、剣でこの『閃光』を討つつもりか？　血迷ったか、ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユ」

「大真面目です。僕は剣を馬鹿にしないタイプの貴族なの、で！」
少女は、突貫した。大剣を持っているとは思えぬ速度の疾走。なるほど、言うだけのことはある。
しかしそれは、空を飛んで戦うこともあるワルドにとってあまりにも遅い。
『ガンダールヴ』さえ下したその技、見せてもらいましょうか！」
ワルドは鼻で笑いながら、杖を構える。
よもや、自分相手に接近戦とは。挑発して近接戦に持ち込み、長さと重さに勝る大剣で挑めば、勝機があるとでも思ったのだろうか？なんという愚かさ。最後に考えた策がその程度ならば、一合合わせるまでもない。
一撃で胸を貫き、殺す。
レイピアのように杖を持つワルド。
それに対し、ルシィは――
「だ、りゃあっ！」
大剣を、投げた。
それは異様な速度だった。まるで小枝か何かのように、勢いよく飛んでくる大剣。しかし。
「甘い」
鉄拵えの杖で受け、流す。
衝撃は、思った以上に軽かった。『ライトネス』でもかけて軽くしていたのだろう。だが、その分威力も落ちている。
弾かれた大剣は落下中に魔法が解け、ワルドの右後方に落ちて重々しい音を立てた。
どうやら、『ライトネス』の効果時間を見誤ったらしい。まともに受ければ杖が折れただろうが、これでは受け流す必要さえなかった。破れかぶれの策に、ワルドは思わず苦笑する。
しかし、ルシィは足を止めない。木の杖だけを持って、ワルドへと向かっていく。
もはや万策尽きたのだろうと、そう思われた時。
――ルシィは、四人に増えた。

「何！」
杖を振り、魔法を発動するルシィたち。空気の渦を纏い、杖が輝く。
『エア・ニードル』。
四人は方向を変え、ワルドの眼前、右側面、左側面へと走った。最後の一人は頭上に跳んだ。事前に『ライトネス』をかけたのか、その跳躍は軽く、高い。
まさか、この少女は『偏在』を使うことが出来たのか？　四方から同時にスクウェアクラスの魔法を受ければ、いかなワルドとて命は無い……いや、違う。
走ってくるルシィたちから、足音が消えている。
「幻か！」
それこそは、ルシィの最も得意とする魔法。二つ名の由来となった『鏡』の呪文。付け焼き刃ではない、熟練した呪文。
しかし、見抜いたからには脅威ではない。
ワルドは耳を澄ませた。ルシィほどではないが、ワルドもまた風メイジ。聴覚は並より遥かに鋭敏である。
やはり、音が聞こえるのは、頭上に跳んだルシィのみ。『エア・ニードル』で生まれた空気の渦が鳴らす風の音。
険しい顔で、ワルドへと落下するルシィ。この一撃で敵を撃ち殺さんとする気迫。
だが、それももはや無意味。
「……本当に、惜しい」
ワルドは杖を構え、落ちてくるルシィを貫いた。

――そして、貫かれたルシィは空気に溶けて消滅した。
「な、に？」
そこに残ったのは、杖のみだ。
そう、『エア・ニードル』を纏った杖のみ。それが、ワルドの目の前に落下していく。

ワルドは呆然としかけ、理解した。
――あの少女は、杖を上に向かって投げたのだ。跳躍する幻とともに。
前方にいたルシィの一人が、落ちてきた杖に手を伸ばす。
ワルドは反射的に彼女を貫く。しかしそれさえも、空気に溶けて消滅した。
残りは二人、右と左、どちらが本体なのか――答えはもう、明白だった。
「言ったでしょう。僕は剣を、馬鹿にしない！」
既に、避けきれない間合いまで詰められていた。
少女は剣に振り回されながらも、回転するようにワルドへとそれを叩きつける。
ワルドの防御が間に合ったのは奇跡と言えるだろう。しかし、レイピアを模した細い杖では、大剣の一撃を受けることは出来ない。
鉄拵えの杖は折られ、ワルドは衝撃に吹き飛ばされた。

ぎりぎりの、戦いだった。
ルシィは倒れたワルドに杖を突きつけ、荒い息を漏らす。
「僕の、勝ちです。『閃光』」
「ああ、そうだな。きみの勝ちだ。よくぞこの僕に打ち勝った。大したものだよ」
「……なんですか。殊勝な態度を取っていれば、殺されないとでも？」
ルシィは訝しげにワルドを睨む。既にルイズは『イーグル』号に乗り込み出発した後だろう。目的は何一つ果たせず、ワルドはここで死ぬ。悔しくはないのだろうか？
「最後の。足音がなかったのは、『サイレント』かな？」
「……ええ。僕だったら、それで気づくので」
答えつつ、ルシィは違和感を抱いた。
何か、何かを見落としている。あまりにも重要な何かを。

「最初の様々な魔法も素晴らしいものだった。称賛しよう、きみは――」
「待ってください」
ルシィの心拍が上がる。
冷や汗をかきながら、頼むからそうでないと言ってくれと、そう祈りながら、問いを口にする。
「あなた、なんであの時から……あんなに余裕があったんですか？」
その意図するところを、ワルドも理解したのだろう。羽帽子の貴族は、残忍な笑みを浮かべて言う。

「――この身は、『偏在』による分身だ。きみは僕に勝ったが、『閃光』には勝てなかったな、『鏡』のルシィ」

それを聞いて、ルシィは、走った。
呪文を唱えている時間ももったいなくて、走りながら、『フライ』を唱えた。
既に、ワルドが最初に展開した『サイレント』は解けていた。
中庭からわずかに離れた礼拝堂から、悲鳴が響く。逃げたと思っていたはずの、ルイズの悲鳴。
壁を破壊し、礼拝堂へと突っ込む。
「……あ、あぁ」
しかしもう、遅かった。
「ウェールズ、皇太子……」
白いマントをつけたルイズ。杖を持ったワルド。
倒れたウェールズの胸には、風穴が抉られていた。
「ほう……まさか我が分身を下すとは」

「ワルド……」
「だが、既に目的のうちの一つは達成した。あとはルイズを殺し、手紙を奪うのみ」
「ワルドぉっ！」
怒りのままに、『ウィンド・ブレイク』を撃ち放つ。
しかしそれはより強い一撃で相殺され、余波がルシィの体を吹き飛ばした。
「そのまま逃げていればいいものを。わざわざ危地に飛び込んでくるとはな」
「黙れ！」
ルシィは立ち上がり、更に呪文を詠唱しようとする。しかしその瞬間、ルシィの背後に影が出来た。
「がっ……！」
吹き飛ばされる。
背後に立ったのは、折れた杖を持つワルドだった。
折れた杖で殴打されたルシィを見て、ルイズが叫ぶ。
「ルシィ！」
「とどめを刺さなかったのは失敗だったな。杖がなければメイジは無力だと思ったか？」
立ちはだかる二人のワルド。
もはや、勝機は無い。ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユにはもはや、敗北するより道が無い。
しかし。
それでもまだ、ルシィは立った。
「ルシィ、なんで……」
「才人に、頼まれ、ましたから。ルイズを、頼むって……」
「なんでよ……ルシィは、女の子じゃない！　なのに、こんな！　ねえ、やめて、やめてよ」
杖を構える少女へと、無情に杖を突きつけるワルド。
ルイズは子供のように泣き、懇願した。
「お願い、やめて……」

片方のワルドが、呪文を唱える。『ライトニング・クラウド』。それはもはや、ルシィの『エア・シールド』で受けられる威力ではない。
だけど、ルシィは、ルイズの前に出た。
友達との約束は、守らなければならなかった。
呪文が完成し、ワルドがルシィに向けて杖を振り下ろそうとした瞬間――

「サイト！　助けて！　ルシィが死んじゃう！」

礼拝堂の壁が轟音と共に崩れ、外から烈風が吹き込んだ。
「貴様……」
壁をぶち破り、間一髪飛び込んできた才人が、ワルドの杖をデルフリンガーで受け止めていた。

０８―２　異界の双風（後）

ワルドを見る才人の目は、火のような怒りに燃えていた。
「てめえ……」
横殴りに剣を払う才人。ワルドはそれを、飛び退って躱す。
才人は、横目でちらりとルシィ達を見た。
ルシィは、失神していた。ルイズが焦りと不安に満ちた顔で、何度も気を失ったルシィに呼びかけている。
「許さねえ」
唇をぎりっと強く噛み締めて、才人は唸った。
それに対し、残忍な笑みを浮かべる二人のワルド。
「そうか、なるほど。主人の危機が目に映ったか」
「よくも、ルイズ達を騙しやがったな」
「目的のためには、手段を選んでおれぬのでね」
剣を腰だめにして、突っ込んでいく才人。三人の間で交わされる剣戟。
しかし、やはり腕の火傷が痛むのか、戦況は芳しくない。ワルドは羽根のように才人の攻撃をかわし、もう一人のワルドが折れた杖を才人に振るう。
不安げに才人を見るルイズの前で、ルシィが目を覚ました。
「ぐ……」
「ルシィ！　大丈夫？」
「ええ……。イル・ウォータル・デル……」
ルシィは『治癒』を詠唱し、自らの傷を癒やしていく。
なかなか癒えない傷跡を見て、ルイズはぽろぽろと涙を零した。
「ごめんなさい、わたし、ルシィの使い魔が教えてくれてたのに、無視して……」
ルイズのそばから、ナストが顔を出す。
その口にくわえられたのは、ルシィの遺書だ。もしワルドが裏切り者だった時に備え、日も昇らない内に用意しておいたもの。
しかしそれは、封も開けられないまま折り曲げられていた。

「見たの。昨日、サイトが、あなたの部屋に入っていくところを」
昨日の夜。ルイズは、近くの部屋で話すルシィ達の会話をこっそりと聞いていた。
自分に別れを告げた才人は、ルシィと楽しげに話していた。
嬉しそうに談笑するルシィと、部屋を出ていく才人の満足げな顔。それを見て、ルイズはどうしようもない悔しさと、寂しさ、そして悲しさを溢れさせてしまった。才人はもう、自分のことなんてどうでもいいのだろうと、そう思った。
「ばかですね、ルイズ……、もしそうだったら、僕に、君のことをよろしく頼むなんて、言うはずがないでしょう」
そして、ルシィはまた立ち上がった。ナストを肩に乗せ、眼前の敵を見据える。
完全に回復したわけではないが、これなら十分に戦える。ルイズは慌てて止めようとしたが、ルシィは首を横に振った。
「どうして、そこまでして戦うのよ……！」
「好きだからですよ、才人が」
「っ……」
「そして、君が」
「え？」
ルシィは杖を構えながら、ルイズの顔を覗き込み、微笑む。
「僕は、君たちのことが大好きです」
苦戦する才人に向けて、ルシィは走った。
才人は、追い詰められていた。折れた杖を持つワルドを相手にしているために、もう一人の魔法に対処できない。
無慈悲な本体が唱える『ウィンド・ブレイク』。今の才人には、それを避ける手段が無い。
「才人！」
しかしそれは、ルシィの『ウィンド・ブレイク』で相殺された。
ワルドの魔法が、威力を殺される。先ほどまでのルシィなら余波で吹き飛ばされていた一撃を、完全に、防ぐ。
現れたルシィは、彼らが気を取られている内にいつものマフラー姿

に変わっていた。壁の穴から吹き抜ける風が、青い布をたなびかせる。
「ルシィ！」
「助太刀します、才人！」
背中合わせになる二人。
才人は折れた杖を持つワルドに向けて、ルシィは本体のワルドに向けて、それぞれ相対する。
「力量で劣る者が二人になったところで、勝てると思ったか？　『ガンダールヴ』もトライアングルも、この『閃光』には届かぬ！」
そうしてもまだ、ワルドは強い。剣術で才人を上回り、魔法でルシィを上回る。二対二になっても、彼らの不利は変わらない。
しかしそこで、デルフリンガーが叫んだ。
「思い出した！　お前、『ガンダールヴ』か！」
「なんだよてめえ、こんなときに！」
「俺は昔、お前に握られてたぜ。六千年も前の話だ！　懐かしいねえ、泣けるねえ！　相棒と、そこの娘っ子が頑張ってるんだ！　俺もこんな格好してる場合じゃねえ！」
デルフリンガーの刀身が光り出す中、ワルドは『ライトニング・クラウド』を放つ。ルシィが『エア・シールド』で防ぐが、弾けた稲妻が才人の方へと漏れてしまう。
が、しかし……それは、輝き出したデルフリンガーの刀身に吸い込まれた。
「ちゃちな魔法は全部、俺が吸い込んでやるよ！　この『ガンダールヴ』の左腕、デルフリンガーさまがな！」
「デルフリンガー……！　才人、交代です！」
「わかった！」
位置を入れ替わる二人。
杖を折られたワルドがルシィの魔法で吹き飛ばされ、本体の放つ魔法がデルフリンガーに吸収される。
「なるほど、やはりただの剣ではなかったようだ。――では、こちらも本気を出そう」

「まずい……っ！」
ルシィは本体へと向き直り、才人とともに猛攻をしかけた。しかし、ワルドは軽業師のように剣戟と魔法をかわしながら、呪文を唱える。
「ユビキタス・デル・ウィンデ……」
呪文が完成した、次の瞬間。
二人だったワルドが、五人に増えた。
それこそは『風の偏在（ユビキタス）』。スクウェアのみが扱える、風の魔法を最強と呼ばせうる所以。一つ一つが意思と力持つ、『偏在』する風の分身。
ルシィは初めて、その発動の瞬間を見た。
魔法とともに巻き起こった、風の流れ、空気のゆらぎ。トライアングルでは決して届かない、圧倒的な魔力の量。
密度を増した攻撃に、二人の優勢は、一瞬で崩れる。
「がはっ！」
「ぐっ……！」
吹き飛ばされる二人。地面に転がるルシィと才人。
才人は、とっさにデルフリンガーへと叫んだ。
「おい、伝説の剣！　もっと伝説っぽいことやってくれ！　このままじゃ殺される！　必殺技とかねえのか！」
「んなもんねえよ。おりゃあ、剣だってのよ。しかし、何だったかな。思い出せねえや。今の相棒がどっか安心してるせいか？」
「これが安心してるように見えるかよ、くそっ！」
もはや、勝ち目は無い。戦力差は二倍以上。敗北以外の道など、あるはずがない。
しかし、それでも。
才人は、剣を持って立ち上がる。
それは、いつか見た、目も眩まんばかりの希望であり、輝きの姿だった。
「才人……！」
才人は壁を背にして、前と左右、三体のワルドの攻撃をどうにか捌

く。しかし、残った二体が、ルシィに向けて杖を振るう。ルシィでは一人を相手にするので精一杯。受けきることは、できない。
「やめなさいよ！」
ルイズは叫んだ。恐怖に震えながら、杖を構える。
彼女はメイジでありながら魔法を使えない。本来なら、そんなものを警戒する必要はない。
だが、ワルドはルイズの真の力を知っていた。
強い感情は魔力に影響する。この窮地に際して『あれ』の片鱗が出てこないとも限らない。
「ぐあっ！」
ワルドは咄嗟にルシィを蹴り飛ばし、盾に使い、ルイズの射線を遮った。
このまま放てば、ルシィを巻き込む。ルイズははっとなり、呪文を止める。
その隙を見て、ワルドの一体が無防備なルイズに躍りかかった。
「ルイズ！」
才人は叫んだ。
相手は五人。才人は三人を相手にし、ルシィは一人を抑えている。
どうあがいても、ここにあの分身の攻撃を止められる者はいない。
しかし。
今この時、少女は見たのだ。
その湖面の瞳に、映したのだ。
立ち上がる才人を。
立ち向かうルイズを。
そして、ずっと待ち望んでいた、『偏在（ユビキタス）』の発動を。
ルシィの中で、決意が漲る。
魂の奥底で、風が轟々と唸っている。
親愛が、友情が、勇気が、希望が、強い強い感情が、彼女の心を震わせる。
魔力は気力だ。
気力は感情だ。

強い感情の力は、魔力の総量に影響する。
「――ユビキタス・デル・ウィンデ」
ルシィの魂から、風が吹く。
異世界から吹く風が、頬を撫ぶった。

転生者は『偏在』する。
今ここに、『鏡』の少女はその身を映す。
「――――」
礼拝堂から音が消えた。
思わず、全員が動きを止め、それを見る。
「……馬鹿な」
鉄拵えの杖は、ルシィに受け止められていた。
――虚空から現れた、もう一人のルシィに。
最初からいたルシィと違い、マフラーはない。
しかし、それは決して幻ではない。ワルドの一撃を防いだことが、彼女が実体を持つことを証明していた。
「この瞬間に、スクウェアへ至ったというのか!?」
「『風の偏在(ユビキタス)』、確かに習得しました。ご教授ありがとうございます、ワルド子爵!」
烈風が放たれる。
それはもはや、トライアングルに収まる威力ではない。
メイジの頂点、スクウェアに相応しい一撃だった。
「がっ……!」
油断していたワルドの一体が吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。
「おの、れ……! 調子に乗るな!」
ワルドの攻撃が、激しさを増す。
だが、才人は三体を相手にし、二人のルシィが二人のワルドを相手にしている。もう、ルイズに攻撃が飛ぶことはない。
戦況はもう一度持ち直した。

しかし、それでも。
それでもまだ、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドは、強い。
こうなったワルドに、もはや一切の余裕は無い。容赦は無い。
もともと一人を相手にするのでも手一杯な才人は、三人の猛攻に徐々に押し負けていく。スクウェアになったルシィはワルドと同等の力を手に入れたが、戦闘経験は相手の方が上。
「ルシィ！　もっといっぱい分身してくれ！　十人ぐらい！」
「無茶言わないでください！　覚えたての呪文ですよ！」
「そうですよそうですよ！　僕一人出すのでも精一杯なんですから！」
「才人の方こそ必殺技出してくださいよ！『ガンダールヴ』なんでしょ！」
「ですです！　頑張れ頑張れさ、い、と！」
「二人になった途端、うるせえ！　やっぱりいいよ、分身しなくて！」
才人のツッコミと、剣戟が、キレを増した。振り下ろされるデルフリンガー。それはワルドでさえひやりとさせる一撃だった。飛び退いてかわす。
「でも、まずい、ですね……」
ふざけたような調子で才人を応援するルシィだが、しかし、内心は冷静である。
このままでは、勝てない。先の分身との一戦のように、どうにかして、相手の不意をつかなければ。
「デルフリンガー！」
「どうしたね、銀色の娘っ子……うおっと！」
ルシィの一人が、風の刃を乱れ撃つ。才人ごと巻き込んだ攻撃だが、デルフリンガーに吸い込まれ、彼が傷つくことはない。三人のワルドが、かわしきれずに裂傷を作る。
「おいおい、相棒ごとぶった切るところだったぞ！」
「あなたがいたからやったんでしょう！　さすが、伝説の剣！」
「嬉しいことといってくれるじゃねえか！」

一時、才人が有利になる。だが、不利な戦況をひっくり返すほどではない。
「なら、一瞬だけでも……ラナ・デル・ウィンデ！」
ワルドごと、地面に叩きつけるように『エア・ハンマー』を詠唱する。
床が粉砕され、煙のような粉塵が巻き上がった。ルシィ二人とワルド二人、四人の姿が見えなくなる。
「視界を遮ろうが、音が聞こえるなら問題は無い！」
ワルドが言う。次の一瞬、音が消えた。そして、煙の中から焦ったような声が響く。
「しまっ……分身が！　一人、そっちに行きます！」
煙の中から、羽帽子の男が飛び出す。それは三人を相手にしている才人の方へと飛び込み、『エア・ニードル』を突き出してくる。
三人ならなんとかしのげていた才人も、四人がかりでは、勝ち目が無い。焦る才人だが、こればかりはどうにも出来ない。
絶体絶命かと思われた時。
飛び込んできたワルドは、あろうことか本体のワルドに杖を突き込んだ。
「なっ……！」
寸前で回避する本体。避けきれなかった風の渦が、ワルドの左の二の腕を深々と抉る。
飛び込んできたワルドは舌打ちをし、少女の声で悪態をつく。
「ちぃっ！　これでもダメですか！　もう死んでくださいよ、完全に入るところだったでしょう、今の！」
「『フェイス・チェンジ』か！　服まで変えるとは！」
魔法が解け、ワルドに化けていたルシィが元へと戻る。
風と水の合成呪文。スクウェアスペル『フェイス・チェンジ』。これまでのルシィなら劣化魔法しか使えなかったそれも、スクウェアとなった今では十全に扱える。服はナストによる補助があってのものだ。
「ぐっ！　……ちょっと、ちゃんと決めてくださいよ、僕！」

「この男が化け物なんです、仕方ないでしょ！　ルシィちゃん可愛いから許してください、僕！　って、がっ!?」
煙の中で、二人のワルドを相手にしていた分身のルシィが吹き飛ばされ、地面を転がっていく。本体のルシィもまた、本体のワルドに魔法をぶつけられ、吹き飛ばされた。風に煽られたマフラーが首から外れる。
混戦となりつつある中、ルシィは冷や汗を流していた。
この裏切り者は強すぎる。もっと、決定的な意味での、不意をつかねばならない。しかし、『あれ』がもう一度通用するだろうか？　同じ戦法を二度繰り返して勝てる相手ではない。
立ちはだかるワルドを、ルシィは苦しげな瞳でにらみつけた。
だが、絶望しかけるルシィに対し、ワルドもまた、冷や汗を流していた。
目の前の『ガンダールヴ』一人ならば、魔法を吸い込む剣があろうがどうとでもなる。それは、スクウェアになりたてのメイジ一人でもそうだ。
だが、それら二人が相手ならば？　聞くところによると、『ガンダールヴ』は主人の魔法詠唱を守るための使い魔らしい。加えて、この少女の放つ巧みな搦め手は、ワルドでさえ意表を突かれる突飛なものばかり。
いかな『閃光』と言えど、これは万が一もあり得る。本体のワルドは警戒し、慎重に三人との間合いを測った。
ワルドから隙が消える。
これではもう一発逆転は狙えない。ルシィも、才人も、消耗していた。ワルドの精神力も相応に減っているだろうが、それより先にルシィたちが追い詰められる方が早い。もはや、後が無い。
こうなったら、一か八か。ルシィは叫んだ。
「逃げましょう、ルイズ！　君の手紙さえ置いていけば、ワルドも無理には追ってこない！」
「ダメよ！　姫さまから頼まれたの、そんなこと許されないわ！」
「こんな時にまで意地張るな、ばか！　ルシィ、いいからそいつを逃し

てくれ！」
才人が、ワルドの攻撃からルイズたちを守る。分身達は死にものぐるいで剣を振る才人につきっきりとなり、本体は少し離れた位置で様子を見ている。この位置取り、ワルドが魔法を撃つには自分の分身が邪魔だ。今だけはルシィたちに攻撃が届かない。
ルシィはルイズの胸元に無理矢理手を伸ばし、胸ポケットを漁った。ルイズは取られないように抵抗したが、まさぐった後の手にはいつの間にか古びた手紙が握られている。
「やめて、ルシィ！　返して――」
ルシィはルイズの胸ぐらを掴み、耳元で言った。
「僕は残ります。才人は、後でそっちに行かせますから」
「え？」
「ルイズより、この手紙が優先のはずです。これを持って時間を稼ぐから、逃げて。ワルドのグリフォンが城の西ホール横の檻に入っています。『フェイス・チェンジ』で才人をワルドに化けさせれば、少なくとも地上までは乗せてくれるはずです」
言うなり、ルシィは『コンセンデイション』を唱えた。水系統の初歩。空気中の水蒸気が凝固し、あたりに霧が立ち込める。
「行って！」
「でも！」
「いいから！　僕の命を無駄にしたら、恨みますからね！」
霧の中響くルシィの声。戸惑いながら、ルイズは走る。
いける。これでいい。何も変わらない。当初の予定通りだ。自分が捨て駒となり、ルイズを逃がす。
あとは、今打った策で、どれだけ時間が稼げるか――
「生憎だが」
しかし、次の瞬間。
「こちらにとっては、手紙より、ルイズの方が優先だ。手に入らぬ以上、その力は、今ここで消す」
「っ！」
ワルドの声とともに、風が唸った。

ルシィは耳を澄ませる。自分の霧のせいで見えないが、今魔法を撃とうとしているのは本体のワルドだ。だが、ルイズを撃ち抜くには、ワルドの分身が邪魔なはず……。
「まさか――自分の分身ごと、撃ち抜くつもりですか!?」
ルシィは走る。
ワルドが、ここまでルイズに執着しているとは思っていなかった。
『エア・スピアー』が、折れた杖を持つワルドを貫き、ルイズへと飛翔する。
分身を貫いたことで威力が減じてはいるものの、人一人を殺すには十分な力を持つ空気の槍。
もう防御魔法は間に合わない。
ルシィの体で防ぐ以外に、ルイズを守る方法は、なかった。
「ルシィっ!」
――赤い華が、まるで噴水のように咲いた。
才人の頬にまで、その飛沫は飛ぶ。
吹き飛ばされ、手紙を放してしまうルシィ。ルイズが吹き飛んだルシィを受け止めようとするが、体の小さい彼女では衝撃を殺せず、もろともに地面へと転がる。
「し、まっ……」
手紙に向けて手をのばす。
しかし、もうダメだ。ワルドはひらひらと舞う手紙を風で絡めとり、自分の手の中へと収めた。
胸元を赤く染めながら、ルシィは崩れ落ちる。うつ伏せに倒れた彼女から、じわじわと赤色が広がっていく。
魔法の制御は途切れ、そばに立っていたもう一人のルシィが幻のようにかき消えた。
「終わりだ、ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユ」
まだだ。まだ終われない。こんなところで消えるわけにはいかない。
ルイズは、先ほどルシィを受け止めたために昏倒してしまった。まだワルドは四人残っている。才人ではワルド三人に防戦を維持する

のが限界。ルシィが消えれば、今度こそ勝ち目がなくなる。
どうする？　どうすればいい？　どうやったらこの状況で才人とルイズを助けられる？
「諦めろ、貴様はそういう人間だ。湖面の月が何を照らせる？　何を映そうが鏡は鏡。英雄にも聖女にもなれはしない。お前は何も、変えることが出来ない」
酷薄な笑みを浮かべ、ワルドは言う。
ようやく、鬱陶しかった相手が消えた。この少女さえ下しておけば、一度倒した『ガンダールヴ』など敵ではない。
しかし、その時である。
「よくもルシィを……」
才人から発せられるびりびりとした怒気が、ワルドの肌を震わせた。
咄嗟に振り向き、警戒する。
一人になった才人に向けて、剣戟をくわえるワルド。
しかしながら、才人の動きは次第に速さを増していく。少しづつ、攻撃が押し返されていく。
こんなはずではと、にわかに動揺するワルドたち。
「は、はっ……ルイズだけでなく、そこの少女にまで懸想していたのか？　恋人を殺されて怒ったか、『ガンダールヴ』!?」
「恋なんかしてねえよ！　ただ……ルシィは友達だった！　だからお前だけは、絶対に許さねえ！」
才人が絶叫し、ルーンが光る。その輝きを受けて、デルフリンガーが光る。
「そう！　その調子だ相棒！　思い出したぜ、俺の知る『ガンダールヴ』もそうやって力を溜めてた！」
才人の剣が、ついに一体のワルドを斬り倒した。
「なぬ……!?」
「『ガンダールヴ』の強さは心の震えで決まる！　怒り！　悲しみ！　愛！　喜び！　何だって良い、とにかく心を震わせな、俺のガンダールヴ！」

このままでは、まずい。
分身の一体を生贄にし、残った二人のワルドは飛んだ。
いかなワルドといえ、『ガンダールヴ』とスクウェアメイジ、二人を相手にしたのだ。既に相当に消耗している。これでは、今の才人は止められない。だが、『フライ』を使って空へ退けば、もはやこちらを追える者はいない。
才人は即座に剣を切り上げ、跳んだ。凄まじい速度に、囮になった分身が一瞬で斬り裂かれる。一秒とて時間を稼げはしない。あのワルドがまるで藁束扱いだった。
ワルドは最後の分身を盾にする。それもまた、一撃で斬り伏せられる。
が、そのワルドは斬られながらも体を使って、ぶつかるように才人の勢いを止めた。その隙に、本体のワルドが更に離れる。
しかし、才人は止まらない。咆哮を上げ、消えかけていた分身を足場に、更に跳んだ。
まるで矢のように、残った本体へと突貫する。
ワルドが魔法を詠唱しているが、もはや間に合わない。否、例え何が阻んだとしても、才人は必ずこの男を斬り伏せる。
体を捻り、回転する。
左手のルーンが、光を増す。
デルフリンガーが光り、輝く。
そして、刃が迫った、その瞬間。
――ワルドは、奪った手紙を盾にした。
「くっ……!?」
才人が止まる。
彼の脳内には、昨夜のウェールズが映っていた。
鍵付きの小さな宝箱に、あのお姫さまの手紙をしまっていたウェールズ。何度も読み込まれた古い手紙。愛しそうに手紙に口づけをして、名残惜しくルイズへと手渡す姿。
才人には、斬れなかった。
ワルドの呪文が完成する。デルフリンガーを振りかぶった才人の

体に、スクウェアクラスの爆風が叩きつけられる。
まるで流星のように、才人は地面へと墜落した。
ワルドは息を切らし、眼下の才人たちを見下ろす。
「流石に、これ以上は、危ういか……。まあ、目的の二つが果たせただけでもよしとしよう。どのみち、戦が始まればここにも我が『レコン・キスタ』の大軍が押し寄せる。愚かな主人ともども灰になるがいい！
『ガンダールヴ』！」
そう捨て台詞を残し、ワルドは壁に去った穴から飛び去った。
立ち上がろうとする才人だが、疲労は限界に達している。もう、思うように体が動かない。
「ああ、相棒。無茶をすればそれだけ『ガンダールヴ』として動ける時間は減るぜ」
デルフリンガーが説明した。
つまり、もう、ルシィと、ウェールズの仇を討つことは出来ない。いいや、たとえ『ガンダールヴ』の力が使えたとしても、才人に空は飛べないのだ。
「どうするね、相棒？　『イーグル』号はもう出港した頃だろう。今に戦いが始まるし、皇太子のいない王軍はきっとあっという間に負けちまうよ。敵はすぐにここまでやってくる」
「ああ……」
才人はふらつきながらも、ルイズをそっと抱え、椅子へと運んでいく。
「ルイズを、守る」
「……空元気はよせやい、相棒。今のお前は、体だけじゃなくて、心までボロボロだ」
「……」
「結婚式が思ったより早く始まったからな。今ならなんとか包囲される前に逃げ切れるかもわからんが……戦うのはもう、無理だ」
デルフリンガーの言う通りだった。ルシィの死が、才人の心の中に、重い澱みとして溜まっていた。
「ん？　ちょっと待て、相棒。娘っ子の胸にあるそりゃなんだ？」

「ルイズの胸に何かがあるもんかよ」
「だから空元気はやめなっての。ポケットに入ってる紙だよ、紙」
「紙？」
ルイズの胸ポケットに入っていたものを取り出す。
「え？」
――それは、奪われたはずのウェールズの手紙だった。
「どうなってんだ……？」
「おい、なんかもう一枚出てきたぜ？」
ウェールズの手紙に重なって、折り曲げられた手紙が入っている。
どこかの家の家紋が捺された封筒だ。裏にはまだ乾いていない真っ赤なインクで、走り書きのような文字が記されている。
「なんて書いてあんだ？　見たことねえ文字だ」
それは、この世界で才人ともう一人しか知らぬ、日本語だった。
『僕の遺書です。
ジョンキーユ伯爵に渡してください。
ルイズはやっぱりそっちで面倒見たほうがいいと思います。
また会いましょう、才人。出来たら、地球で』
才人はばっと後ろを振り返る。
デルフリンガーが震え、あっと驚いたような声をあげる。
「おいおい、こりゃおでれーた！　どうなってんだ相棒！　あっちの娘っ子が消えちまったぜ？」
そこにルシィの死体はなく、ただ血溜まりだけが残されていた。いや、血溜まりというか、これは……。
才人は頬についた赤色をぺろりと舐める。
味がしない。
「昨日の、色付き水……」
才人は、壁の穴をくぐって、ワルドの飛んでいった空を見上げる。
どこか覚えのある風が、頬をなぶった。
その懐かしい感触に、才人は本当に嬉しげな、苦笑いを浮かべるのだった。

ワルドは、ニューカッスルの空を飛んでいた。
精神力は尽きかけ、もはや風系統の初歩である『フライ』でさえ覚束ない。口笛でグリフォンは呼んだが、鍵のかかった檻にでもいるのか、いくら呼んでも来はしなかった。
だが、もう少しで、味方の陣地……『レコン・キスタ』の展開する貴族派の軍に合流出来る。
そうすれば、ひとまずは安泰だ。ルイズは手に入らなかったが、ウェールズを暗殺し、手紙を奪うことも出来た。ワルドはほっと息を漏らす。
直後、手紙を持っていた指が食い千切られた。
「が、ぐうっ!?」
たまらず、ワルドは苦鳴を上げた。
慌てて左手を見る。
そこには、青い目をしたイタチのような小動物が噛み付いていた。持っていたはずの手紙は、どこにもない。
「有りえん、魔法の反応など全く……いや、そうか、先住の！」
エルフや幻獣の持つ先住の魔法は、『ディテクト・マジック』でも探知出来ない。――謀られたのだ、あの少女に。
ワルドは怒りに顔を震わせた。
幻獣を振り落とそうとするが、エコーのナストはちょろちょろとワルドの腕の上を動き回って逃げる。ワルドは杖を持っているために、左腕一本しか使うことが出来ないのだ。
しかし、戦闘に長けたわけでもないエコーが、歴戦のメイジにいつまでも抵抗出来るはずもない。
ナストはワルドの左手に捕まり、その首を片手で締め上げられる。高い声を濁らせ、悲鳴を上げるナスト。使い魔はワルドの手に爪を立て、必死に抵抗する。
「無駄に抵抗をするな、お前の主人は死んだのだぞ！　大人しく――」

「――デル・ウィンデ」

ずぱんっ！　と勢いよく、ナストを掴んでいた腕が切り落とされた。

痛みより先に、驚きがあった。

ワルドは呆然と、上を見る。

「バカな」

銀髪青眼の少女が、真っ直ぐにワルドへと落ちてきていた。

「貴様！　ルシィ・アメイニアス・ド・ジョンキーユ！　死んだはずでは！」

「二度目の死んだフリですよ！　杖を折られた分身を切り捨てたのは早計でしたね、ワルド子爵！」

あの時。

ルシィは、霧で姿を隠すと同時、こっそりと礼拝堂の物陰に隠れた。

『偏在』で作った自分の分身には、色付き水と手紙に化けたナストを渡し、自分の身代わりに。

分身の代わりには、『鏡』で作った幻を用意する。

そして、貫かれた分身が消えた時には幻を同じ場所に置き、自分の死を偽装した。

こうなることを予想していたわけではない。どれも全て、その場その場で苦し紛れに考えていった、ワルドを奇襲するための策。だが、それが才人を奮い立たせた。

ワルドに何度も傷つけられ、ボロボロになった姿で、しかし彼女は楽しげにワルドへと突っ込んでいく。

「しかしまあ、あんなその場しのぎの策に騙されながら、よくもあそこまで勝ち誇れたものです！　ああ、湖面の月を射って得意になるあなたの滑稽なこと！　見るが良い、『閃光』は今跳ね返された！」

「おのれ……ッ！」

ワルドは残った腕で杖を構え、魔法を放つ。しかしそれはルシィの魔法とぶつかり合い、相殺された。才人の猛攻を受け、消耗したワルドには、もはや格下の小娘を倒し切る力さえも残っていなかった。

「ええ、確かに僕は何も変えられないのでしょう！　運命という風に吹かれる怯懦な客人！　英雄にも聖女にもなれぬ、男とも女ともつかない、半端な観客！」
　ルシィは落ちながら『エア・スピアー』を詠唱し、ワルドへと放つ。弱りきったワルドの『エア・シールド』は容易く貫かれ、その腹に大きな風穴を穿つ。
「ですが！　それならばあなたも変わりはしない！　風がいかにかき回されど、言の葉の一枚すら掴めぬ哀れな男！　どれだけ雲を流そうと、彼らの輝きは曇らない！」
　『ライトニング・クラウド』を応用し、電気分解で爆鳴気を生み出す。
　空気を圧縮し、着火。爆発が、ワルドの全身を焦がした。
「なぜ僕があなたを追えたのかわかりますか!?　この敵陣のただ中に！　彼らの輝きを見たからだ！　あなたが覆い隠そうとした双月の、その眩さを『鏡』に見ろ！　ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド！」
　ルシィの杖が光を纏う。『ブレイド』の呪文により、輝く刀身が生み出される。
　ワルドが震える右腕で杖を構えようとするが、もはや遅い。
　両者は縦に交差し、ワルドの体が袈裟斬りに斬り裂かれた。
　空気抵抗を殺しながら落ちたルシィは、落ちていたナストを受け止め、首に巻く。青いマフラーが、風に揺れてたなびいた。
「さっきの三発が、ウェールズ皇太子と、ルイズと、才人の分です！　あとついでにこれがナストの分！」
　すれ違い、振り向きざま、正しい使い方で発動された『ライトニング・クラウド』が稲妻を放ち、ワルドに当たる。
　『フライ』によってルシィ達が空に浮かぶ中、ワルドは煙を上げて地上に落ちていった。
　水音を立てて堀に落下し、見えなくなってしまうワルド。
　だが、流石に死んだだろう、とルシィは頷く。いかに歴戦のメイジとはいえ、これで生きていたら逆に恐怖だ。
「それで、シルフィードはもうニューカッスルの下まで来てるんです

よね、ナスト？」
ナストが澄んだ声で返事をする。それは、”大いなる意思”を介した幻獣同士の会話だ。タバサの使い魔である風竜、シルフィードの鳴き声を聞いたナストにより、キュルケ達がルイズらを助けに来ていることを、ほんの少し前に知ったのだ。
「オーケー。じゃあ、あとは」
ルシィは、前を見る。
そこにあったのは、五万の軍である。
しかしそれも当然だろう。あれだけ派手に魔法を撃ったのだ。ルシィが陣に攻め込んできたのだと思い、弓兵が、銃兵が、竜騎兵が、メイジが、一斉に二人に向かってやってくる。
「生き残れますかね、これ。なんで僕こんなところにやってきちゃったんでしょう。まあ、ナストを見殺しにするわけにはいきませんでしたけど」
だが、ルシィは力強く杖を握る。
きっと、才人ならそうするだろうと思ったのだ。
「――行きましょうか」
世界すら越えた風が、アルビオンを吹き抜けていった。

００―０　自由の遍在（完）

ニューカッスルの攻城戦から、数日後。
アルビオンの王都、ロンディニウムの郊外で、メイジの男女が歩いていた。
フーケと、ワルドである。
「……しかし、よく生きてたね。水系統のメイジを何人も集めて、三日三晩『治癒』を唱えさせはしたけれど。魔法衛士隊ってのは、みんなあんたみたいな化け物なのかい？」
「俺自身も驚いている」
魔法の連撃を食らったワルドは、ボロボロになりながらも生きていた。
左腕は二の腕から先が失われ、全身は包帯まみれ。腹には貫通傷が残り、胸板には裂けたような痕。顔も包帯でぐるぐる巻きにされており、もはや美男子が見る影もない。
最後の『ライトニング・クラウド』だけはどうにか小さな『エア・シールド』で弾いたものの、それ以外はまともに食らったのだ。『エア・スピアー』と『ブレイド』が内臓を抉らなかったのは、完全に奇跡と言えるだろう。あの少女に、急所を外すような容赦はなかったのだから。
「もしかすると、これもまた必然なのかもしれんな。あれが言ったように、運命の風向きというのはそう簡単には変わらんらしい。俺にはまだ、なすべきことが残っている」
「なに詩的なこと言ってるのよ。あんたもこないだのウェールズみたいに、虚無の魔法で動いてるんじゃないだろうね？」
「わからん。そもそも、すべての人間が『虚無』の系統で動いているのかもしれん。いずれにせよ、答えは聖地に眠るのだろう」
「その聖地も、今回の結果で少し遠のいた気はするけどね」
あの後。
押し寄せた『レコン・キスタ』の大軍は、確かに王軍を滅ぼし、革命戦争に勝利した。

しかし、その損害はあまりにも手酷いものだった。
「聞いた？　あんたをずたぼろにした風メイジの話。使い魔を竜に変えグリフォンに変え、陣という陣に幻をばら撒いての大立ち回り。指揮系統が大混乱したせいで攻城も長引き、戦死傷者は六千。王軍の二十倍よ、もうどっちが勝ったかわかりゃしない」
「もしあれと一緒にウェールズを生かしたままだったなら、さらに酷いことになっていただろうな。考えるだけで恐ろしい」
「ま、最後には精神力も切れて、包囲の中討ち取られたって話だけどね」
フーケの言葉にワルドは黙り込む。
果たしてそれも本当かどうか。討ち取ったというそれもまた、湖面に映った幻ではないのだろうか？
「流石は、あんたと同じ風のスクウェアってところかしらね。宿屋で見た時はそう大したやつには思えなかったけど」
「あの『ガンダールヴ』に消耗させられなければ、ここまで苦戦しなかったのだがな。次会う時は、必ず……」
「何？　もうやり合う機会なんてないよ。確かにラ・ヴァリエールの娘と『ガンダールヴ』は逃げたみたいだけど、あれは生きてないわ。死んだところを見たやつが何人もいるんだからさ。顔に似合わず感情的だね、全く」
フーケの呆れ顔を見ていると、自分が強情を張っているように思えてくるワルドである。
「ほら、まだ傷が癒えきってないんだ、今はゆっくりと休むんだね。後でまた見舞いに行ってやるさ」
「ああ……、っと」
ワルドの胸元から、何かが落ちた。
それは、銀で出来たロケット付きのペンダントであった。鎖がちぎれている。あの『ブレイド』による一撃を受けた際に、鎖の一部が壊れていたらしい。
左側の脇道に転がっていくペンダント。
拾おうとするワルドだが、自分の左腕がもう無いことに気づく。そ

こで、ひょいとワルドのペンダントを拾い上げる人影があった。
フードを被ったその少年は、落とした拍子に開いたペンダントをまじまじと見つめている。どうやら買い物帰りらしい。手に持った袋には、攻城戦の折に市場へと流れたと思しき、アルビオンの水兵服が入っていた。
「すまない、それは俺のだ。返してくれ」
「……！　……ええっと、はい、どうぞ」
ワルドにペンダントを手渡し、慌てて立ち去ろうとする少年。
ちらりと見えたその顔に、ワルドはどこか既視感を抱いた。即座に杖を抜き、少年に突きつける。
「止まれ！　顔を見せろ！　貴様、『ガンダールヴ』――」
「え？」
フードを外しながら、振り返る少年。
それは、確かにあの『ガンダールヴ』に似た黒髪黒目だった。肌の色もよく似ている。
しかし、顔立ちは全く違った。中性的な雰囲気のあるその少年は、困惑したようにワルドを見つめている。
「……いや、悪かった。人違いだ」
「そ、そうですか。じゃあ、僕はこれで」
少年はフードを被り直し、走り去っていく。
「わっ……危ないよ、気をつけな！」
「ごめんなさい、先生！　あ、間違えた、お姉さん！」
脇道から飛び出した少年と、ワルドの大声に戻ってきたフーケがすれ違う。
フーケは少年の後ろ姿をまじまじと見ながら、道を歩いていこうとするワルドに問いかける。
「なんだいありゃ。『ガンダールヴ』と同じ国のやつかい？」
「いや、『ガンダールヴ』は異世界から来たはずだ。同郷の人間などいるはずがない」
「ふぅん、じゃあたまたまか。しっかしまた、あんたも物好きだね。あれぐらい年下のが好み？」

「バカを言うな。ルイズは必要だったからそうしただけだ。それに、男色に走るほど酔狂ではない」
「はあ？　男色？」
フーケは再度少年の方を見る。
確かに、走り方も物腰も、ちらりと見えた横顔も、間違いなく男のそれだ。
しかし、自身も素性を偽ることの多いフーケは、直観的にその正体を察する。
「……なるほど。あんたの言う通りだったね」
「何がだ？」
「いいや。ああいうのに手伝わせれば、盗みも捗るだろうと思っただけさ」
ちらりと見えた銀の髪を最後に、少女は幻のように姿を消す。
熟練の盗賊であるフーケでさえ、舌を巻くほどの男装の上手さだった。

トリステイン王国のとある辺境。
そこを治めるジョンキーユ伯爵は、わなわなと怒りに震えていた。手には、折り曲げられた手紙が握られている。
「ふざけるな！　アレが死んだだと!?」
「はい、ラ・ヴァリエール公爵家の方が持ってきたものなので、間違いはないかと……」
「バカな！　アレを欲しがる貴族が何人いると思っているのだ！　玉座が空位である今が好機なのだぞ!?　あの女、無理をして三女まで産ませたというのに、結局不良品しか作らぬではないか！　あんな喘息持ち、妻にするのではなかった！」
執務机に拳を叩きつけるジョンキーユ伯爵。そこに、実の娘に対する心配は一欠片としてない。
「まだあの使える知識の出処も吐かせていなかったというのに……親

の言うことも聞かず、魔法学院になどに入学しおって！　これならばあのまま屋敷に幽閉しておくのだった！」
「恐れながら、学院で魔法の修練を積むよう言ったのは旦那様自身では……」
「口答えをするな、メイド風情が！」
　五年前から伯爵家に勤めているメイド長は、内心でため息をついた。娘が死んだというのにこの態度。貴族の父親とはみんなこうなのだろうか？　ルシィお嬢様は新人の時から良くしてくれたというのに、当主であるジョンキーユ伯爵はこれだ。
　メイド長以外も気分は憂鬱だった。十歳になってからは心身も安定し、平民にも差別意識なく優しく接していたルシィ。彼女が死んだと聞き、使用人たちはどんよりと落ち込んでいたのだった。猛り狂うのは、ジョンキーユ伯爵のみである。
「ラインスペルを覚えた時は良い見せ物になったが、真っ当な淑女になった途端これか！　なぜ私の物はいつもいつもすぐ壊れる!?」
　扉の隙間から遠目に見ていたルイズは、この男、引っ叩いてやろうかしらと思った。
　だが、そんなことをしてもルシィが戻ってくるわけではない。
　客人が見ているとも気づかず喚き散らして狂態を晒す伯爵から、ふん、とルイズは顔を逸した。
「いい気味だわ」
　肩を怒らせながら廊下を歩き、応接室へと向かう。
　そこでは、才人が黙々と料理を口に運んでいた。メイド達が作った珍しい肉料理に、なんとも嬉しそうな顔で、涙さえ零しながら舌づつみを打っているのだ。
　主人のわたしがこんなにむかむかしているのに、この使い魔の幸せそうな顔！　ルイズは理不尽に怒り出し、才人の頭をべしっと小突こうとした。
　が、途中でルシィの顔を思い出して、やめた。彼女に、才人には優しくしろと、度々言われていたからだ。
　それに、思い出すのはアルビオンから逃げ出した時のこと。

ルイズは……風竜の上で、才人にキスをされたのだ。そしてその時、こっそりと寝たフリをしたのである。
どうして寝たフリをしたんだろう、と思うルイズ。
考えてみるとそれは、才人に対する胸騒ぎを認めたくないがゆえの行動だった。だが……それと同時に、こうも思うのだ。
――わたし、ルシィの代わりにされたんじゃないかな。才人が助けに来たのは、自分じゃなくて、ルシィだったんじゃないかな、と……。
故人に嫉妬を抱く自分が情けなくなって、ルイズは自分の頬をぱんと叩いた。その音に、びくりと才人が反応する。
「どうした、お前」
「なんでもないわよ。ほら、用事終わったんだからさっさと帰る！」
「まだ食べ終わってねえんだもん」
そう言って、もぐもぐと『はんばーぐ』とかいう料理を頬張る才人。
何よ、とルイズは思った。最近はちゃんと学院の食堂の、机の上で、貴族が食べるようなご飯を食べさせてるのに。あっちの方がずっと豪勢じゃない。確かに、珍しい料理が多くて美味しかったけど。
ようやく才人も食事を終え、二人は学院へと戻っていく。
トリスタニアに向かう馬車に揺られながら、ルイズは才人の横顔を見た。
自分とは違って、普通の、どこかすっきりとさえした顔。仲が良かった相手が死んだのに、悲しくはないのだろうか？　そりゃ、キュルケやタバサは、ルシィが死んだところを見ていないから「自分たちの決闘騒ぎに巻き込まれても平然としていたルシィが死ぬわけがない」なんて言って、飄々としてはいた。でも、ギーシュなんかはルシィの死を聞いておうおうと泣いていたのだ。
こいつも少しは泣けばいいのに、と、落ち着いた後にわんわん泣いたルイズは思う。自分をワルドから逃がそうとしたために、ルシィは……。
涙を堪えるために、ぎゅっと服の裾を掴む。才人は心配そうにルイズの顔を覗き込んで、言った。
「ルイズ。もうちょっとで学院に着くから、トイレは我慢してくれ」

「ばか！　違うわよ、ばか！　なんであんたはそんなに落ち着いてるのよ、ばか！」
「だって俺、別にトイレ行きたくないし……」
ルイズはそっぽを向いた。その後は、馬車が学院に着くまで、一度も口を利かなかった。
門の前で降りると、遠くから羽音が聞こえてきた。
手紙を持った鳥、伝書フクロウである。
ルイズはこちらに向かってくるそれを迎えようとしたが、フクロウはルイズの頭上を飛び越える。
「え、俺？」
自分を指差す才人に、フクロウは頷く。
ルイズは首を傾げた。いつの間に手紙を送ってくる知り合いを作ったのだろう。才人に手紙を送ったって、文字なんか読めやしないのに。
しかし、才人は手紙を見るなり、にやっと笑った。
「……誰から？」
「ルシィからだ」
「え!?」
ルイズは眼を見開く。
才人はそれを不思議そうに見ていたが、ああ、と得心したように頷いた。
「ルシィは生きてる。あの後、俺の代わりにワルドをぶった斬ってったらしい」
「ど、どどど、どういうことよ！　だって、あんなに、血がばーって！」
ルイズは手を振り回しながら尋ねる。才人は、なんてことなさそうに答えた。
「いやあれ、色付き水だから。ルシィすごい元気。反乱軍相手に大立ち回りして、最後はもっかい死んだふりして逃げたって」
「そ……そういうことは、先に言いなさいよ、この、バカ犬――！」
優しくしろと言われたのも忘れ、ルイズは才人をぶん殴った。グーで。殴られた才人はうぎゃあ、と悲鳴を上げながら、必死にルイズへ

弁明する。
「だって、ルシィが死んだことにしてほしそうだったし！　ギーシュとかと一緒にいる時に話したら、べらべら話されそうだったんで、黙ってたら、忘れてた。ごめん」
「ごめんじゃないわよ！　ルシィが生きてるんだったら、だったら……」
――だったら、あの時のキスは、わたしが好きだってことで、いいのかな。
そう思って、ルイズは顔を茹で蛸のようにした。
でも、当分ルシィは帰ってこないだろうし、やっぱり代わりにされたのかも。今だって、すごい嬉しそうに手紙見てるし……。覗き込んで見ても、変わった文字で書かれてて、何書いてあるのかわかんないし……。
う～、と唸るルイズ。才人はルイズがよっぽど怒っているのだと思い、ビクビクとしながら手紙を持って問いかける。
「あの、ここだけ読めないんだけど……何て書いてあるか、分かる？」
「なによ……」
ルイズは渡された手紙を見る。そこには――
『ルイズへ。
ワルドのこと、早めに気づかなくてごめんなさい。ルイズの代わりに爆発で焼いておきました。僕は元気なので安心してください。
実は僕も才人と同じ世界の出身なので、こっちでも元の世界に帰る方法を探してみます。出来たらルイズも、才人のことを助けてあげてください。二人はお似合いなので、もしくっつくなら嬉しいです。あとルイズはもっと素直になった方がいいです。僕に嫉妬するぐらいなら才人に好きって言ってあげてください。才人もルイズのことが好きですから。
あ、でも、才人はかっこいいので、ほっといたら浮気するかもですね。頑張ってください。
――ルシィ・アメイニアスより』
ルイズは、手紙を握りしめてぷるぷると震えた。

る、ルシィあの子、こっちが死んだと思って落ち込んでたら、こんな、こんな……！
「なあ、なんて書いてあったんだ？」
「知らない！　知らないわよ、もう！」
素直になれないルイズは、手紙を破いて、放った。
千切れた紙片が、風に吹かれて流れていった。

アルビオンの一地方、サウスゴータの辺境を、二人の少女が歩いていた。
双子の姉妹のように瓜二つな、銀髪青眼の少女であった。
『レコン・キスタ』に大立ち回りをして落ち延びた逃亡者とは思えぬ、男ならず女の目まで惹く華やかな彼女たち。少し背の高いすらりとした体躯に、愛らしい整った顔立ち。
もう、彼女に姓は無い。彼女の名は、ただのルシィ・アメイニアスである。
「ほらほら！　どうですかこれ！　セーラー服ですよセーラー服！　いえい膝上十五センチ！　おへそもちらり！　これ、最高だと思いませんか!?」
「ええ最高ですとも！　ルシィちゃん最高！　可愛い！　この世界にローファーが無いのが悔やまれますね本当に！　ギーシュかマリコルヌあたりにも見せてやりたかったです！　才人なら泣いて喜んだでしょうね！」
「そうだ、あれやりましょ、あれ！」
「ええやりましょう！　かもん！」
仕立て直されたアルビオンの水兵服。それを着た分身のルシィがくるりと回転し、スカートとスカーフを翻す。最後に指を立て、可愛らしくウィンクをしながらこう言った。
「お待たせっ、ルシィくん！　一緒に学校いこ？」
「いっえいっ！　行きましょ行きましょ！　もう行けませんけどね、

トリステイン魔法学院！　死んだことになってますし！」
「いいじゃないですか学院なんて！　こんなに可愛いルシィちゃんがいるんですから！」
「ですよね！　にゃー可愛い！　ルシィちゃん可愛い！　こんなに可愛いルシィちゃんが目の前にいるのに僕までルシィちゃんなんですよ!?　頭おかしくなっちゃいますよこんなの！」
　本体のルシィに抱かれたエコーのナストは、うんざりとした鳴き声を上げた。
「なんですかナスト、いじけないでくださいよぅ。二人がかりで可愛がってあげますから、ほれほれ」
「カジノでコインやルーレットに化けさせたのがそんなに嫌だったんですか？　路銀が必要だったんだから許してくださいよ、もう。先住魔法はイカサマがバレないので便利です」
「いやー、だって勝手に運賃二人分取られるんですもん。一人しかいないってのに参っちゃいますよねえ」
　ナストは首を横に振り、分身のルシィが着たセーラー服を前足で指す。
　二人のルシィは、鏡のように互い違いにナストから顔を逸した。
「……えっと、まあ。確かに僕が水兵服なんか買ってたせいで、だいぶ危ないことになりましたけども」
「でもあれでワルドが生きてるとは思わないじゃないですか。こればっかりは僕じゃなくてワルドがヤバいですよ。多分あいつ機銃で蜂の巣にされたって死にませんよ、きっと」
「『フェイス・チェンジ』で顔を変えておいてよかったです。あの大立ち回りで『レコン・キスタ』に顔が割れてたので、最初から変装しておいたのが功を奏しましたね」
「男だった頃の知識があるおかげで、男装も上手く出来ますからね」
　自分同士で会話しながら、田舎町を歩いていくルシィ。風変わりな格好をしてきゃいきゃいと騒ぐそっくり美少女二人組は、仮にも国から逃げているとは思えぬ目立ちっぷりであった。
「どうしましょうねー。無事にアルビオンから脱出出来ますかね、こ

れ」
「なんとかなるでしょう。五万の軍を相手に生き残ったんですよ、僕」
「ですね。せっかくですし、元の世界に帰るための情報収集もしてからいきましょうか」
「才人と会ってちょっと心が揺らいじゃいました。前の家族に挨拶して、照り焼きバーガー食べて……あ、インターネットってのもやりに行きましょう。ポケモンとかいうゲームも遊んでみたいです」
才人との会話を思い返し、ルイズの姿を思い返す。そして最後に、隣に立つ自分を見た。鏡のように、微笑を浮かべる二人のルシィ。
「そうですね、地球とハルケギニア……どっちかにこだわる必要なんてありませんよ」
「ええ。だって――」
ルシィは、空を見上げて思い返す。
そこに月はなかったけれど、心の中には、二つの輝きが映っていた。
「僕はもう、一人じゃないんですから」

０Ｘ―Ｘ＿後日の休日（番外）

「ちぃっ！　ついにイカサマがバレましたか！」
月の照らす繁華街を、銀髪の少女は走っていた。
「追え！」「逃げるな、この野郎！」「いい加減に観念しろ！」
「うるせえですね！　あなた達だってしっかりイカサマしてたじゃないですか！　自分のことを棚に上げないでください！」
少女は、後ろから追ってくる男たちを手慣れた動きで撒いていく。
機敏な動きではあるが、時々動きがもたつく。それは、体にまとわりつく物が原因だった。
「というかなんですかこのエコーの数！　もう毛玉みたいになってますよこれ！」
彼女の体には、イタチに似た小動物が何十匹もしがみついていた。
この生き物は、”変化”の力を持った幻獣・エコー。
本来は人に隠れて森で静かに生きる幻獣である。
だが、ここにいるエコーたちは、カジノでイカサマの道具に使われていた。彼らは子供のエコーを捕まえられ、無理矢理言うことを聞かされていたのだった。
「まったく、許せませんね！　エコーの力をイカサマ道具に使うなんて！　ねえナスト？」
自身の使い魔に問いかけるが、白毛のエコーはジトっとした視線で主人を睨んでいる。
こんなことを言ってはいるが、この少女もまた、つい先ほどまで自分の使い魔でボロ儲けをしようと企んでいたのだった。
「もう……魔法が使えないと不便ですね、本当に！」
本来、風を極めたスクウェアメイジの彼女なら、この程度の相手から逃げるのは容易い。
だが、今は魔法を使うための杖が無い。カジノへ入る時に預けてしまっていたのだ。
「ああもう、杖の無い僕なんてただの可愛い女の子じゃないですか！
ていうかエコーの皆さん！　走りづらいのでカードか何かに化け

てください！　ほら、ポケットに入って……って、やっ、こら、違います！　どこに入ってるんですか、ばか！」
胸元に入り込んだ子供のエコーをポケットに突っ込み、路地を駆け抜ける少女。角を曲がって追っ手を振り切ろうとするが、すぐに追いつかれてしまう。
「喰らいやがれ！」
そんな彼女の背中へと、一本のナイフが飛んだ。
ばっ、と夜の街に赤いものが飛び散る。
悲鳴を上げて、少女は路地に倒れ込んだ。握り込んだカードの束が路地へと散らばる。
「くそっ、手こずらせやがって……」
「い、いいのか？　殺しちまったぞ」
「はっ、どうせこいつも札付きだろ。メイジっつっても杖がなきゃ俺たちと変わんねえな。さっさとエコーを回収しろ。逃しちまったら事だ」
カードを拾おうとする男たち。
しかし、そこで一陣の風が吹いた。
「しまっ……おい、集めろ！」
「ああ、くそ！　こんな時に！」
男たちがカードを求めて走り去る。
「……。……まあ、そっちはただの紙切れなんですけどね」
無人になった路地で、倒れていた少女がむくりと起き上がった。
ポケットに入れていた手には、預けたはずの杖が握られている。
『エア・シールド』に突き刺さったナイフが背中から落ち、懐からは色付き水の入った容器が覗く。
「ありがとうございました、ちびちゃん」
自分の杖を持ってきた子供のエコーへと礼を言う少女。
腐っても、五万の軍勢から逃げおおせた風メイジ。この程度でどうにかなるはずもない。
前世の記憶を持つ少女は、今日も自由にハルケギニアを生きていたのだった。

この銀髪の少女――ルシィ・アメイニアスは、異世界よりの転生者である。
前世は少年、今世は美少女。
自分の可愛らしさにナルシストをこじらせた、元男子高校生にして元伯爵令嬢。
第二の生を自由に生きる転生者は、助けたエコーを連れ、彼らを宿の一室へと案内する。
そして、周囲を何匹ものエコーに囲まれながら、静かにこう呟いた。
「完成しましたね、楽園が」
そう、自分の姿に化けさせた、何匹ものエコーに囲まれながら。
エコー達は首を傾げつつも、ルシィの前でぎこちなく傅く。
王者のごとく部屋の中心に座すルシィは、二度の人生の中でも最上に近い至福を味わっていた。
本来なら人に化けることは出来ないエコーだが、ルシィの魔法による補助を受けた今は違う。
これまでなら少し動いただけで解けてしまったルシィの魔法も、スクウェアになった今では相応に洗練されたものになっていた。才人達と別れた後も、魔法の修練はしっかり続けているのである。
「すいませんね才人。先に理想の異世界美少女ハーレムを作ってしまって……。どうやらハルケギニアの主人公は僕だったみたいです、ごめんなさい」
腹が立つほどに余裕綽々な彼女の前では、様々な姿のルシィが佇んでいた。
二十歳程度の大人なルシィ。十歳程度の幼いルシィ。耳の長いエルフルシィ。ケモミミ生やした獣人ルシィ。
傍から見ればまるで姉妹のような少女達が、様々な格好でルシィの周囲を囲んでいる。
何人ものルシィに囲まれてご満悦なルシィであったが、ふと、メイド服を着たルシィに視線をやり、天井を仰ぐ。
「そういえば、うちの実家の人たち、大丈夫でしょうか」
ルシィは、元々ジョンキーユ伯爵家の令嬢である。公的には先のア

ルビオンの攻城戦で死亡したことになっているため、ここにいるルシィに貴族としての立場は無い。
が、それで彼女の残したものが何もかも消えるわけではないのだ。
「ジョンキーユ伯爵はともかく、使用人の人たちには一言挨拶しておいた方がいいかもしれませんね」
よし、と呟き、ルシィは立ち上がる。
「ありがとうございます、エコーのみんな。名残惜しいですが、そろそろ行きましょうか。元の住処まで案内します。もう捕まっちゃダメですよ」
澄んだ高い声でエコー達が鳴く。
ルシィはそれを聞いて、満足気に部屋を出ていった。

そういうわけで、ルシィは久々にトリステイン王国へと帰ってきていた。
現在、彼女は首都トリスタニアに滞在している。
ジョンキーユの領地はトリスタニアからそう遠いわけではないのだが、トリスタニアに着いた時点で路銀が心もとなくなってしまったのだ。
現在のルシィは日銭を稼ぐためにトリスタニアの店で勤務中である。ジョンキーユ領は賃金が低いため、ここで稼いでおいた方が効率が良いのだった。
東方から輸入したという『お茶』を出す『カッフェ』で「ウエイトレス衣装を着たルシィちゃんというのもありですね……」など呟くルシィに、店の店長が話しかける。
「いやあ、助かったよルシィちゃん。最近は人手不足でね」
「いえいえ、こちらこそ」
「『お茶』に合うお菓子や料理も教えてくれたし、本当に感謝しているよ」
「こう見えて結構物知りなんですよ、僕」

「そうだねえ。物腰もなんだか気品があるし……もしかして、魔法学院の生徒さんだったりするのかい？」
「まさかあ。貴族のお嬢さまがウェイトレスするわけないじゃないですか」
「それもそうだね」
店長は懐から給料袋を取り出す。
三つの袋をルシィ『達』へと手渡しながら、店長は言う。
「はい、じゃあ今日の日当……『三人分』ね」
「わーい！」
「ありがとうございます！」
「嬉しいです！」
「ここまでそっくりな三つ子ってのも珍しいなあ。明日もよろしく頼むよ」
ひらひらと手を振る店長と別れ、人気の無い場所で『風の偏在』を解除する。
あれから二体出せるようになった分身が消え、路地で一人になったルシィ。
雨音だけが鳴るトリスタニアの細い街路で、少女はふっと口元を緩めてこう言った。
「チョロいですね、ハルケギニア」
一人で三倍の給料を得ているわけだが、卑怯などと言ってはならない。
ルシィは確かに三人分働いているのだから。
こういう時、一人であることをバラすと何故か給料も一人分になるのが社会の理不尽なところである。
「前世の知識を使えば、もっと簡単に稼げるんでしょうけど……アウトローな身分だと、中々難しいですよね。こっちの方が気楽なので構いませんけど」
ふんふんと鼻歌を歌いながら、雨降るトリスタニアを歩いていくルシィ。
商売のネタになる知識をまとめたメモ帳なども懐に入ってはいる

が、このままでは当分使う機会もなさそうだった。
と、そこで……。
「あれ？」
ちらりと、狭い路地に入っていく男女の影。
片方は、ルシィの尊敬する同じ世界出身の少年、平賀才人。
そしてもう片方は、まるで市井の町娘のような格好をした、ラ・ヴァリエールの公爵令嬢、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールであった。
ルシィは「なんでお嬢様のルイズがあんな格好で街を歩いているのだろう」と自分のことを棚に上げて首を傾げる。
が、才人と一緒にいる姿を見てすぐにピンときた。
そう、二人は今、デートをしているのだ。
「やるじゃないですか、才人……」
ルシィは友を称え、その場を去る。
久しぶりに話したいことはあったが、二人の邪魔をするのは悪い。ルシィだって、分身と偏在デートしている時にナンパされたら衝動的に『ウィンド・ブレイク』を放ちそうになる。
ここは機会を改めよう。どうせなら、彼らとはもっと劇的に再会したい。
そう思いつつ、チクトンネ街の宿へと向かう。
いつまでも雨の中に居たくはないし、下手に知り合いと出くわすのも困る。『フェイス・チェンジ』で顔を多少変えてはいるが、スペルを維持し続けるのもそれなりに疲れるのだ。
しかし、角を曲がろうとしたルシィは、飛び出してきた男に突き飛ばされ、水たまりの中に尻もちをついた。
「痛っ……！　ちょっと、何するんですか！」
「黙れ！　貴族の道を塞ぐな、平民風情が！」
バチャバチャと水音を立て、慌てて去っていく貴族の男。
その後ろ姿を見て、ルシィははっと息を漏らした。
「ジョンキーユ、伯爵……？」
ルシィの今世における父親である。

領地から離れ、トリスタニアで一体何をしているのか……疑問に思うルシィの後ろで、這いずるような音が響いた。
「まだだ……まだ、倒さねばならぬ」
振り向くルシィ。
そこにいたのは、ボロボロになった短髪の女剣士であった。
剣士は朦朧としたような声で、絞り出すようにルシィへと話しかけていた。
「そこの、誰か……ヤツを、追ってくれ……。私の、銃士隊に連絡を……」
「だ、大丈夫ですかお姉さん!? ひどい火傷……」
「頼む、ジョンキーユを……あの裏切り者を逃がすわけには……」
がくりと崩れ落ちる女剣士。
ルシィは突然のことに狼狽えつつも、カッフェの店長に女剣士を預け、雨降る街を駆け出した。

「おのれ! リッシュモンめ、あんな剣士ごときに倒されおって……!」
悪態をつきながら、ジョンキーユ伯爵は逃げていた。
売国の陰謀を企てていた高等法院長、リッシュモン。
彼に協力していたジョンキーユ伯爵だったが、女王アンリエッタの仕組んだ策により、リッシュモンとともに追い詰められてしまったのだ。
「秘密の通路が知られてしまったこの状況で、どうやってアルビオンに亡命すればいいのだ……くそっ!」
息を切らしながら、狭い路地を進んでいくジョンキーユ。
しかし、そこでは彼の行く先を塞ぐように一組の男女が言い合いをしていた。
「だから! どうしてあんたの首筋に姫さまの香水がついてるのよ!」

「いや、それは……ほら、寝てる時に寝返り打って、顔近づいて、みたいな」
「いいわ、もう。体に聞くから」
「待てって、いや、爆発はダメだって」
ジョンキーユは苛立ちとともに罵声を吐き出す。
「どけ！　私は貴族だぞ！」
直後、ルイズの杖が振られた。
才人は咄嗟に屈んでかわしたが、その後ろで巻き起こった爆発は伯爵を軽々と吹き飛ばした。
「ぐわあぁぁッ!?」
ゴロンゴロンと路地を出て、大通りまで転がっていくジョンキーユ。
男女の二人組は、それに気づくこともなくぎゃあぎゃあと痴話喧嘩を続けている。
「な、なんだあの魔法は……!?」
通行人が遠巻きに彼を見る中、ジョンキーユはふらつきながらもどうにか立ち上がる。
その背後で、ぱしゃりと水を跳ねさせる足音が響いた。
「馬鹿な……き、貴様……」
リッシュモンの魔法を受けたはずの女剣士が、しっかりとした足取りでジョンキーユ伯爵を追ってきていた。
ジョンキーユは慌てて、近くにいた町娘に杖を突きつける。
「来るな！　少しでも動いてみろ、私のスペルがこの娘を撃ち抜くぞ！」
「ほう」
「アルビオン行きの船を用意しろ！　人質の命が惜しければな！」
「そうか。で、その人質というのはどこにいる？」
ジョンキーユ伯爵は手元を見る。いつの間にか、人質の少女が消えていた。
おかしい、確かに自分は娘の腕を握っていたはずだ。あの銀髪の少女はどこに行ったのだ？

「貴族としても父親としても失格ですね、ジョンキーユ伯爵」
女剣士が、呆れたようにそう言って――呆気にとられた伯爵のこめかみを、剣の柄で打ち抜いた。

「素晴らしいですわね、アニエス。まさかメイジを二人も成敗するだなんて」
「いえ、私はリッシュモンを倒した後に、気を失ったはずなのですが……」
「あなたがジョンキーユを倒すところを、何人もの通行人が見ているのですよ？　気を失っても使命を果たす意思の強さ……あなたは、英雄と呼ぶにふさわしい騎士です」
アンリエッタとアニエスが喋りながら酒場を出ていく。
「行ったな」
「そうね。で、サイト、とりあえずここに座って？」
それを見送ったルイズは、早速才人への尋問を再開することにした。そう、『姫さまとキスした疑惑』への追求である。
この使い魔は、ただお仕置きするだけじゃ口を割らない。一度おだててやって、口を軽くせねば……と、ルイズが酒場で覚えたテクニックを活用しようとした時、一人の女性客が入ってきた。
「サイトさんにラ・ヴァリエールさま。お久しぶりです」
「あれ？　あなた……ジョンキーユ家の」
「ええ、メイド長です」
綺麗に頭を下げるメイド服の女性。
才人は頭を掻きながら、彼女に対して話しかける。
「その……伯爵が捕まったのには、なんて言ったらいいかわかんないけど……」
「気にしないでくださいませ。これを機会に、使用人一同で商売を始めることにしましたので」
「え、そうなんですか？」

「はい。色々と案がありまして……今は『ばーがーしょっぷ』という飲食店を開くのが候補の一つです」
ルイズは「ヘンな名前ね」と返したが、才人はぱちくりと眼を瞬かせた。
メイド長はくすりと笑い、二人に言う。
「ひどいですね、お二方。知っていたなら、教えてくだされば良かったのに」
「え？　あ、もしかして……」
「良いのですよ。事情があるのは分かっていますから」
気まずそうに視線を逸らす二人に向けて、メイド長は楽しげに話す。
「誰からとは言いませんが、お二人に伝言です。ヴァリエールさまには、『才人と仲良くしてくださいね』と」
「う……」
足と爆発をお見舞いしてやろうと思っていたルイズは、苦々しげにうめきを漏らす。
ほっとする才人に、メイド長は続ける。
「才人さんには『ルイズを大事にしなきゃダメですよ。もし浮気とかしたら、ちゃんと殴られなきゃダメですよ』と」
「えっ」
「それでは」
「ちょっ、ちょっと待ってくださいメイドさん！　他に何か無いんですか!?」
トリスタニアの休日を、真っ白な閃光が彩った。